

『ヘーゲルは論理學の冒頭の Die Luft vom Sein において、先づ質を論じ、次いで量を論じてゐますが、マルクスもまた、その資本論において價值を論ずるや、正にこの順序によつてゐるのであり、且つこの二つの問題をはつきり區別しなければならぬといふことは、彼が諸所において吾々に注意してゐるところであります。例へば彼は、——「一商品の簡單なる價值表現が二つの商品の價值關係のうち如何に隠れてゐるかを發見する爲めには、吾々は先づ、この價值關係をその量的方面から全く獨立に考察しなければならぬ。しかるに人々は大抵これと正反對の遣り方をして、價值關係のうちにとゞ、二種の商品の一定分量がそれにおいて互に價值を等しとせらるゝ比率をのみ見る。人々の看過するところは、異なる物の大きさはそれが同一單位に還元された後、始めて量的に比較されうるものとなる、といふことである。』（河上・宮川共譯本、第一分冊、八四頁）——と言つてゐます。しかるに土方氏はいふ、『先づ起る疑問は、價值の實體が商品に含まれる社會的に必要なる勞働量であるといふことについて、如何なる證明が存在するかと云ふことである』と（五一頁）。斯様な表現は氏の古い論文から最近の論文に至るまで繰返し現はれてゐるところですが、氏がその排撃せんとしつゝある對象について如何に無智であるかは、この一語でも分かるであります。マルクスは「抽象性における人間勞働」をもつて「價值を形成する實體」となし、しかる後「そ

の（一の使用價值または財の）價值の大きさは如何にして測定されるか？」との問題を提起し、これに答へて「そのうちに含まれてゐる價值を形成する實體の・勞働の・分量によつて」と言つてゐるので（同上共譯本四四頁）。問題は明かです。すなはち價值の實體は勞働であり、價值の大きさはその勞働量によつて測定される。しかも土方氏によれば、「價值の實體は商品に含まれる社會的に必要なる勞働量である」といふのが、マルクス價值論の根本命題である！ 氏の文章のなかには「東京帝國大學經濟學部に經濟原論の講座を擔當する私としては、迅速なる答辯の責任を感じざるを得ない云々」といふ言葉があるが、かゝる責任を感じつゝある排撃者は、故意にかそれとも實際にか、その排撃せんとする目的物に對して此の如く極端に無智であり、乃至は極端なる無智を粧ひつゝあるのです。吾々は斯かることが學問の名において公然行はれつゝあることを、坐視するに忍びざる者です。

『これはほんの一例です。階級闘争がたびたび社會の表面に脅迫的な形態において發現して以來、社會科學は——現狀を辯護せんことを意識的乃至無意識的な目的となせる社會科學——は、實に急速なる墮落の道を急ぎつゝあるのです。現狀が益々辯護しがたきものとなるがゆゑに辯護論は益々要求さるゝのであり、それゆゑにまた辯護論は愈々窮地に陥るのです。少くとも私の専門とする經濟學の領域にあつては、近代の學史はすなはち斯學の墮落の歴史で



あり、その滑稽化の歴史に外ならぬのです。この間にあつて、ひとりマルクス學のみが「何物にも畏伏せしめられざる」辯證法によつて、一切の事物からその外皮を剝奪してこれが真相を曝露するの任務に當つてゐます。それゆゑに、マルクス學の成立以來、學問の歴史は、一面においてまた此のマルクス學に對する讒誣の歴史です。マルクス學に對しては有らゆる方面の有らゆる有能の士が「現状辯護のための疚ましき心と悪しき意圖と」に驅りたてられて、「御用的な論難攻撃」を續けてゐます。しかも全世界の人類の總實踐は益々マルクス學の正しさを證明しつゝある今日、これが論難攻撃は益々窮地に陥らざるを得ません。それゆゑに此の攻撃の方面においても、そこにはたゞ墮落化・滑稽化の歴史がありうるばかりです。昭和二年——マルクス學の著しく我國に流布されたる今日——「東京帝國大學經濟學部に經濟原論の講座を擔當する責任を感じざるを得ない」土方博士が、先きに述べたるが如き著書を公にされざるを得ない理由も、またそれが、以前に他の學者によつて行はれたマルクス價值論の排撃より、遙に質において劣る所以も、畢竟は茲にあるのです。』

土方博士の論著については、すでに多くの人々が有力な駁撃を加へられたが、しかし實際のところは、それ自身がさう本氣になつて取合はれうるほどの價值あるものではない。もし何等かの價值があるとすれば、それは、氏が『價値の實體は商品に含まれてゐる労働量である』と

いふことをもつて、マルクス價值論の根本命題だとされてゐる點、その排撃せんとするマルクス價值論の根本命題についての斯かる甚しき事實の虚構が、——それが筆者自身の完全なる無智に基づくと、正しき理解を妨害せんための意識的な欺瞞に出づるとを問はず、——反動學派の一戦術としての『事實虚構』の好個の見本として役立つといふ點、ただそれのみである。

土方博士に劣らざる事實の虚構を敢てした今一人の學者は、最近（昭和二年十二月一日發行）の『改造』に、『アリストテレスの流通の正義』と題する論文（其一）を公にされた福田徳三氏である。この論文の標題には、『附、河上博士等譯資本論中或重要な不正確又は誤謬について』としてあるが、先づ現はれた論文其一では、この『つけたり』が主役を演じてゐる。尤もこの範圍において、博士が吾々の譯本における缺點として指摘されてゐるところは、後に掲ぐるところによつて明かなやうに、いづれも何等重要なものではない。重要なといふことはマルクスの思惟を活かす上に重要なといふ意味でなければならぬ。恐らく副題にいふところの『重要な不正確または誤謬』は、追て論文其二以下に現はるゝことであらう。今は取り敢へず前記の範圍に記載されたものの検討をなすに止める。

それは前後二箇條にわたる。その一は、第二版の跋文中における吾々の譯文『第一章の三



(價值形態)は全部書き變へた」といふ一句についてである。これについて、福田博士は次の如く述べてゐられる。

『こゝに河上博士等が「全部書き變へた」と邦譯されたのは、事實相違であることは、私の以上の記述で明であらう。而して右一句の其邦譯は、マルクス文の邦譯としては、正確、親切、若くは、詮索を缺くものではあるまいかと思ふ。マルクスは、第一版の其部分を全部削り去つて、而して第一版附録文に多少の修正を加へて、此れと差し換へたのである。其附録文は、決して、全部書き變へられなどはして居らぬ。否、大體に於いては、全く第一版其儘なのである。マルクスの原文は *gänzlich ungearbeitet* とある。此語は場合によつては、「書き變へた」としても、毫も差支ないのであるけれども、マルクスの用ゐた此場合には、其れでは不正確であり不詮索であり、又は不親切ではあるまいか。原意を正確に言ひ表はすには、「全部入れ換へた」「全部差し換へた」とすべきであらう。河上博士等は、第一版に、附録文のあることは、明かに、わざわざ「譯者註」を入れて、其の詮索の綿密さを示めしてゐるから、其附録が、書き變へられなどしてゐないことも、また、知つて居られるべき筈である。しかるに「書き變へた」と譯出するは、少くとも、不正確、不親切、若くは不丁寧の評を免れまい。若しまた知らなかつたと云はれるなら、其れは、少くとも不詮索の嫌を免れないよ

うに思ふ。

『多分第一版を見る便宜を有つてゐなかつたらうと想像せらるゝ人々が、其れを「書き變へられた」としたものとするならば、殆んど、問題とするに足らぬ一些事たるべきであらう。

——例へば、高島氏邦譯資本論の底本は漢堡版第六版で、其れには、右の跋文は、序文と改題し、初めの部分を省いてのせてある。此「書き變へた」云々の見出される部分は、其省かれたものに屬する。従つて此一句は、右の譯本には存しない——第一版は、今では、希覯本となつて仕舞つてゐるから、多くの人は、其れを見る便宜を有たぬのである。見得ざるものについては、如何とも爲し難い。然るに、河上博士は、第一版を見たことを、右註記以外にも而して、餘程久しい以前から、時々公言して居られるし、たしか、第一版の或部分を、何かの雜誌に譯出して居られたようにも覺へてゐる。而して、右譯本の序言には「讀めば讀むほど底の知れぬ著作といへば、經濟學の領域では、この資本論を措いて外にない」と公言して、底の知れぬほど讀んで讀みこなされたことを示し、また「原著者の遺志を最高度に尊重せんことを期する譯者たち」と自薦して居られる。此譯者たちが、「書き變へた」と、事實相違のことを平然と記してゐるのは、「マルクスが文字についてもつてゐた關心は、決して考證學のものではなかつた。彼れの著作の譯出につき、吾々もまた彼れに倣ひ、つと



めて文字の末に拘泥すると同時にまたこれに拘泥せざるの態度をとつた」云々とある、其の拘泥せざる一例に屬するかも知れないが、私は之れに與し得ないものである。但し、此類の不詮索や不正確は、今、私の問題とするところではない。』

右の一文の冒頭には、全部書き變へたといふ譯語が『事實相違であることは、以上の記述で明であらう』とある。そこで遡つて、その『以上の記述』なるものを見ると、それは次の如くである。

『今私は、文獻史的に「資本論」第一、第二兩版の比較考究を企てんとするものでないから、ただその大要をあけて見れば、……第二版においては、その第二十一頁の第三項まで（價值形態の節の前まで——河上補）は、大體において第一版を追従し……それより以下（價值形態の節——河上補）は、第二版は第一版の當該部分を全く削除してあるのである。……しかしその差し換へに入れた部分には、第一版から、若干項を取り入れてある。一二の例をあげれば、第二版二五頁の脚註は、第一版一六頁の脚註を取り、第二版二九頁の第二項は、第一版一四頁の第二項を、同第三項は、第一版一四頁の第四項を、同第四項は第一版一五頁の第二項を、第二版三〇頁の第二項は、第一版一五頁の第三項を、第二版三三頁の脚註は、第一版二三頁の脚註を取り入れたるが如きこれである。』

『而して、右等の場合を除く外は、第二版の「價值形態又は交換價值」中第二二頁の初から第四七頁第四項迄は、處々修正を加へつゝ大體に於ては、第一版の附録文を其まゝ取り入れてある。而して第二版四七頁の最終項「四、商品の魔術性と其の祕密」以下は第一版第三五頁の第一項に該當してゐるのである。』

第一版も第二版も有たぬ人々にとつては、右の記述は恐らく理解し難いであらう。私はそれを次の如く分析的に表示しておく。

一、第二版における價值形態の節は、二二頁から四七頁に及んでゐる。

二、右の部分が、福田博士によれば、『處々修正を加へつゝ、大體においては、第一版の附録文をそのまま取り入れ』たものである。

三、ただその例外となれるものは、脚註を除き本文では、二九頁より三〇頁に互る一頁あまりの部分——福田博士の表現では、これが『二九頁の第二項……同第三項……同第四項……三〇頁の第二項』となつてゐる——である。

此の如きが博士の言ふところである。だが私の見るところによれば、これこそ『事實相違』である。

第三節の價值形態は、カウツキー版では、一四頁から三五頁に及んでゐる。私は誰でもが容



易に見うる此の版本について、ありのまゝの事實を次に述べよう。(吾々の譯本には欄外にカウツキー版の頁が記入してあるから、それを見られても大體の見當はつく)。今しばらく脚註を度外視し、本文だけについて見れば、全體が約十九頁分になるが、その第一版に對する關係は次の如くである。

二〇頁六行目から二二頁九行目まで、——約一頁分、これを第一版本文より取る。

二二頁三三行目から二三頁二〇行目まで一頁足らず、二四頁終より二行目から二六頁三行目まで一頁あまり、二八頁に四行あまり、二九頁五行目から三〇頁一六行目まで約一頁半、三二頁から三三頁へかけての所々合計約二十行、三四頁一行目から三五頁六行目まで一頁あまり、——以上合計約五頁、これを第一版の附録より取る。

一四頁から二二頁五行目まで約五頁半、二二頁一〇行目から二二頁三三行目まで約一頁、二三頁の半ばから二四頁の終より三行目まで約一頁半、二六頁五行目から二七頁の終まで約二頁、二八頁から二九頁にかけて十行あまり、三〇頁の半ばから三二頁一行目まで二頁足らず、三二頁一八行目から三三頁へかけての所々約十行——以上合計約十三頁、これは新たに執筆された部分。

すなはち本文約十九頁のうち、第一版の本文がそのまゝ残されてゐるのは約一頁であり、第一版の附録から採用したものを合計しても、舊稿をそのまゝに利用した部分は、全體十九頁のうち約六頁であつて、残り約十三頁は第二版のために新たに執筆したものである。

なほそのみでなく、第二版には第三節『價值形態』の次に、第四節として『商品の物神崇拜的性質およびその秘密』と題するものがあり、それはカウツキー版において十二頁餘に及んでゐるが、これは第一版の附録では、二頁足らずのものに過ぎなかつたのであり、しかも等價形態の第四の特徴として、最初の簡單なる價值形態を説明せる條下に掲げられてゐたものである。しかるに第二版においては、これを『價值形態』の節から引き離して、獨立の節となしたのであり、従つて簡單なる價值形態の條下における等價形態の特徴の列記は、これを第三までに止めてあるのである。これは價值形態に關する第一版の附録と第二版の本文との間における著しき差異の一に屬する。

第二版の跋文におけるマルクス自身の言葉(吾々の譯本一七頁参照)によれば、『講義的な説明』をなしたところの・またエンゲルスへの書簡中における言葉(一八六七年七月二十二日づけ、『書簡集』第三卷三八三頁参照)によれば、『できうるかぎり學校教師風に敘述した』ところの・第一版の附録『價值形態』のうち、第二版以後に残つてゐる部分は、實に以上の如きものにすぎぬのである。しかし私がかく言へばとて、第一版は今日容易に入手しがたいのだ



から、果して私の言ふところが正しいか、あるひは福田博士の言はるゝところが正しいか、その判断に苦まれるであらう。だが私はすでに雑誌『我等』に第一版附録『價值形態』の一部分を譯載したことがあり、また私が編纂してゐる『マルキシズム叢書』中の一篇としても、かねてより之が邦譯を發行する計畫であり、實はその豫告をなしてから、既に久しきを経てゐる。いづれそのうち公刊するであらうから、讀者はそれについて、吾々の何れが虚偽を申立ててゐるかを裁判されうる日があらう。

事實は以上のごとくである。しかるに福田博士は、吾々が『第一章の三（價值形態）は全部 unarbeiten した』とあるのを『全部書き變へた』と譯出したことをもつて、『事實相違』であり、『マルクス文の邦譯としては、正確、親切、もしくは詮索を缺く』と言はるゝのである。博士のいふところによれば、『マルクスは、第一版の其部分（價值形態を論ぜる部分）を全部削り去つて、而して第一版附録文に多少の修正を加へて、これと差し換へたのである。……マルクスの原文は *sänzlich ungearbeitet* とある。原意を正確に言ひ表はすには、「全部入れ換へた」〔全部差し換へた〕とすべきであらう』といふのである。

だが、第一に、『第一章の三は全部入れ換へた』では、日本語としては意味をなさぬ、——ドイツ語 *unarbeiten* にはたとひ如何なる意味かあらうとも。もし博士の主張せらるゝ如くそ

れが第一版の附録と入れ換へたといふ意味であるならば、『第一版の附録と』といふ文字を補はねばならぬ。たゞ入れ換へたでは意味をなさぬ、何と入れ換へたかが示さるべきである。尤も日本語でも、ただ足駄の『齒を入れ換へた』などとは言ふ。しかしそれは、新らしくの元ものを入れたといふ意味である。

第二に、全部入れ換へたと言つては、それこそ却て『事實相違』になる。私はすでに全體約十九頁のうち舊稿をそのままに採用した文句は約六頁にすぎぬことを述べた。それは入れ換へたと言はるべきではない。しかしそれを入れ換へたとしなければ『不正確であり、不詮索であり、または不親切である』と言はるゝならば、私は博士に尋ねる、——人が家屋を改築した場合に、もし舊建築の用材が何程か元のまゝで利用されてゐれば、彼れは家を『全部建て變へた』といふべきでなく、『全部入れ換へた』といふべきだと、博士は主張さるゝのであるか？

第三、同じ跋文の續きには、『第七章、殊に第二部は、*ist bedeutend ungearbeitet*』としてある。博士に尋ねるが、同じ文章の續きにある此の *unarbeiten* は、やはり『入れ換へた』といふ意味であるか？ もしさうであれば何と入れ換へたのであるか？ この場合第一版の附録はない筈である。——それとも同じ文章の續きに出てゐる同じ文字が、茲では前と違つた意味を有つのであるか？



かく言へばとて、私は決して『全部書き變へた』といふ譯文を固執するのではない。同じ文章の中に『第一章の最後の節「商品の物神崇拜的性質」は ist grossenteils verändert!』とあるのを、同じやうに『大部分書き變へた』と譯出したのは、umarbeiten と verändern との原語の區別を正確に反映してゐないわけである。gänzlich umarbeiten は獨英辭典にも to recast, to remodel などとしてある。『改鑄した』または『改作した』とした方が、より適切であつたであらう。この場合、主たる變化は、理論の内容よりも其の表現の仕方に關して行はれたのであるから。その意味においてならば『不正確』の非難を甘受するのであり、機會さへあれば、勿論悦んで之を訂正するであらう。しかし之を第一版の附録と『入れ換へた』などいふ意味には到底訂正しえないであらう。

私は次の問題に移らう。福田博士が吾々の譯本を非難せらるゝ第二の點は、吾々がフランス譯の巻首に掲げられてあるマルクスの『私信を序文に昇格』させながら、フランス譯には『別に、第一版序文なるものがマルクスの署名、倫敦一八七五年七月二十五日の日付をもつて、四頁に涉つて載せてある』のを譯出してゐないといふことである。これに關する博士の文章は實に珍妙なもので、何等かの見本に永く後代に貽す價値があらうと考へるから、冗長を厭はずそ

の主なる部分を左に轉載しておく。

『……フランス譯文は、河上博士等の註記によれば、一八七二年の春から、一八七五年の春にかけて順次バンフレットとして刊行されたものである。不幸にして、私は、其のバンフレット本を見たことがない。私の架上にある本は、出版者はラシアトルとせず、Librairie du Progrès, Paris, 11 rue, Bertin-Poitee. 巴里、ベルタン・ボアレー町十一番地「進歩書院發行」出版年記載なき三百五十一頁の本である。其書題は Le Capital par Karl Marx. Traduction de M. J. Roy, entièrement révisée par l'auteur. 「カール、マルクス著資本論、ジェー・ロア翻譯、全部原著者校閲」とある。此書の巻頭には、マルクスの肖像、出版者ラシアトル氏宛倫敦一八七二年三月十八日付のマルクス書翰の二つが、寫眞版として載せてある。河上博士等の譯本には、此の書翰を「フランス譯への序文」として其の三三頁に譯出してある。河上博士の見られた其のバンフレット本には、此書翰のことを序文 Préface としてあるか否か、其本を見る能はざる私の知らざるところであるが、一冊の定本として刊行された此書には、其れは、明かに序文ではない。原著者が出版者ラシアトル氏へ宛てた私信として、マルクス自筆の書翰を、寫眞版で複製して掲ぐるに止めてある。而して、別に第一版序文 préface de la première édition なるものが、マルクスの署名、倫敦一八七五年七月二十五日



の日付を以つて、四頁に涉つてのせてあるのである。——カウツキーは、此序文のことを、其民衆版序中に言つて居らぬ。而して、彼は右の私信と、後にあぐる「讀者に告ぐ」とは、ドイツ文序文と並んで、資本論の向後の版に掲げる値ありとは云つてゐるが、其れよりも、遙かに重要な此の本當の序文を重刷する必要のあることについては、一言もしてゐない。而して、河上博士等も、全く同様である。——「フランス譯への序文」とあれば、マルクスの意では、無論此文のことを指さねばならぬものである。出版店主人宛の私信を、マルクスの「フランス譯への序文」とするは、誤であらう。——カウツキーも、其民衆版序文一六頁に、此文のことを Vorwort と記してゐる。……河上博士等は、或はカウツキー文を見て、實物を見ぬ爲めに、彼の誤を其儘受つがれたのでもあらうか。——これは、不正確若くは不詮索の他の一例ではあるまいか。何となれば、バンフレット本には、如何様にあらうとも、私が、今見つゝある本こそマルクスの公認した定本としてのフランス譯書であらうと思ふから。……『ところが、マルクス其人にも、少し腑に落ち兼ねることが見出される。河上博士等は、此の腑に落ち兼ねるマルクスの處爲を、最高度まで尊重せんことを期する爲め、私信を序文に昇格することを試みられたのか、或はまた、其れほどの深い意味はなく、實物を見ず單にカウツキーの不精密な敘述を、其儘受け入れられたのか。

『其の腑に落ち兼ねることといふは、次の如くである。』  
 『單に「第一版」序文とあるから、ドイツ原本の第一版を見ぬ人は、其れを其のドイツ文序文フランス譯と速断するかも知れない、乍去其れは、明かに速断である。ドイツ文第一版の序文は一八六七年七月二十五日附のものであり、此フランス譯定本の其れは、右云ふ如く、一八七五年七月二十五日附——『讀者に告ぐ』の日付は、同年四月二十八日である——のものである。而して、兩序文を一見すれば、兩者は、決して、同一文でないことは、直ぐ知り得られるのである。』  
 (傍點は新たに加ふ)。  
 『……マルクスが、此フランス譯文の序文を起草したときには、ドイツ原本の第二版は、疾く刊行されてゐたのである。前者は一八七五年七月の起草にかゝり、後者は一八七二年(月は明記なしウンターマンによれば、一八七三年)に刊行されてゐたのである。……従つて、忠實、正確の上からも、否、「資本論」其ものゝ使命の上から云つても、フランス譯本は、ドイツ原本の第二版其ものを底本とすべき筈であるは、言ふまでもないところであらう。』

『然るに、フランス譯は、第一版を底本としたか、第二版を底本としたかを判然と示めして



ないのである。……私が腑に落ち兼ねると云ふのは、此事である。わざわざ序文まで起草して定本とし刊行するフランス譯が、三年も前に刊行されてゐる第二版との關係が、前後區々であり、また、決して明瞭に現はされてゐないといふことは、河上博士等の所謂「文字の末梢にまで神経の敏感性を有した」マルクスの著述としては、私には、聊か腑に落ち兼ねるものである。

『但し事實は恐らく次の如くであつたらうと思はれる。パンフレットとして、一八七二年春から一八七五年春までに刊行したフランス譯本は別に改修せられることなく、其儘合冊せられて、一の定本として、一八七五年かまたは其以後に於いて刊行せられ、唯マルクスの序文が一八七五年七月の日付を以つて、卷頭寫眞版二葉の後へ加へられるに止まつたのではあるまいか。パンフレット本を見る稀有の幸福を有せらるゝ如く見ゆる河上博士等こそ、此の疑問を釋すべき人々である。其便を有せぬ憐れなる私共には、其れは不可能なことである。』

私は先づ、吾々がフランス譯の卷頭に載せてあるマルクスの書簡を『フランス譯への序文』となしたことに對して、一言する。福田博士の言はるゝ如く、この書簡は『寫眞版として載せてある。』ところで何人の注意をも惹くであらうことは、有名なる悪筆家のマルクスの筆蹟と

しては、それが特に極めて読み易きやう丁寧に書かれてあることである。そしてそれは恰も一頁大にをさまつてゐる。それで——もちろん私の單なる推測にすぎぬが——私は之をもつて、マルクスが豫め譯本の卷頭に寫眞版で載せらるゝことを承知の上で執筆したものだらうと考へる。それは發行者に寄せた單なる私信ではなく、言はゞ『公開狀』であつたのであらう。そのことは、この書簡の内容自體（吾々の譯本の三三—三四頁参照）からもまた看取しえらるゝ。そこには發行者に對する私用が述べられてゐるのではなく、むしろそれは讀者に向つて語られてゐるのである。福田博士は、それを指して『マルクス自筆の書翰を寫眞版で複製して掲ぐるに止めてある』と言つてゐられるが、筆蹟そのまゝを寫眞版にしてゐるのは、これを輕んずる意味ではなく、むしろこれを鄭重に取扱つたと見るべきであらう。私はこれを書簡の形態における序文だと見、従つてカウツキーがこれをもつてフランス譯への Vorwort または Vorrede と言つてゐるのは、決して彼れの誤りと看做すべきではないと考へる。恐らくそれは、今後も、『ラシアトル氏へ宛てた私信』としてでなく、『フランス譯への序文または序言』として通用するであらう。

なほラシアトル版には、マルクスの書簡を載せた裏の頁に、ラシアトルからマルクスへ宛てた書簡が載せられてゐる。（福田博士が指定されてゐる進歩書院版にはこれを削つてゐるが）。



これも、もし博士が見られたならば、発行者から原著者へ宛てた『私信』だとされるであらうが、私はやはり書簡の形態における発行者の例言だと見る。博士は『フランス譯は、第一版を底本としたか、第二版を底本としたかを判然と示めてない』とて、ながくと腑に落ち兼ねる點をならべ、それについて色々の想像をめぐらされてをり、この關係が『決して明瞭に現はされてゐないといふことは、河上博士等の所謂「文字の末梢にまで神經の敏感性を有し」たマルクスの著述としては、私には聊か腑に落ち兼ねるものである』などと述べてゐられるが、もし博士が此のラシアトル版につき発行者の例言を見られたならば、少くとも最初のうちはドイツ原本の第二版原稿を——それがドイツにおいて公刊される以前に——使用したものだといふことが、分かるであらう。

要するに、フランス譯には、書簡の形態における原著者の序文と、同じく書簡の形態における発行者の例言とが、巻頭に載せられてゐるのであり、吾々はそのうち原著者の分を譯出して、これを『フランス譯への序文』となしたのである。しかし斯く言ふことが悪るければ、これを『フランス譯への序文』となしたのである。しかし斯く言ふことが悪るければ、これを『フランス譯の巻頭に掲げられた書簡』などと訂正しても可い。そんなことは何れにしても重大な問題でない、吾々は考へる。マルクスが『文字の末梢にまで神經の敏感性を有してゐた』と吾

々が言ふのは、そんな馬鹿げた點について言ふのではない。

以上述べたことよりも更に驚くべきことは、福田博士がこの書簡の外にマルクスがフランス譯のため特に執筆した『第一版の序文』なるものがある、と主張せらるゝことである、これは愈々出でて愈々珍妙といふべきである。實はこの點に關する博士の言説の餘りなる珍妙さが、私をしてこの一文を起章する氣にもさせたのである。

博士のいふところを聽け！ 博士の『架上』には『アリストテレス關係文獻の冊子が百五六十種ある』が、その同じ架上には『マルクの公認した定本としてのフランス譯』があり、そしてそれは『第一版序文なるものが、マルクスの署名、倫敦一八七五年七月二十五日の日付をもつて、四頁に涉つて載せてある。』ところで『ドイツ原本の第一版を見ぬ人は、それを、そのドイツ文序文のフランス譯と速斷するかも知れない』が、しかし『それは明かに速斷である。……兩序文を一見すれば、兩者は決して同一文でないことは、直ぐ知り得られるのである。』多くの讀者は、博士のこれらの言葉を信するであらう、そして吾々が斯かる序文を見落してゐることを甚しい不詮索だと考へるであらう。しかし少し落ちついて前後を見通す讀者は、單に博士の文章自體からでも或る疑問を起すであらう。なぜといふに、第一には、フランス譯の



第二版が出るか出ないか分らぬ先きに、——ドイツ原本の第二版が出ることを已に分つてゐるが、——初めて公にする版本に對してフランス譯への『第一版序文』なるもの附せらるゝ筈はないから。現に資本論のドイツ原文の第一版には單に『序文』としてある、それが『第一版への序文』となつたのは、もちろん第二版からである。注意深き讀者にとつて不思議とさるゝであらうと思ふことの第二は、福田博士の謂ゆる『フランス譯への第一版序文』の日付は、博士のいふところによれば一八七五年七月二十五日となつてゐるさうだが、年號こそ違へ、その七月二十五日といふ月日は、恰もドイツ原本の第一版序文の日付(吾々の譯本の一六頁を見よ)と符節を合することである。『腑に落ち兼ねること』を頻りに列擧してをられる博士が、かゝることを平氣で腑に落としてをられるのは、聊か私の腑に落ち兼ねる。

私は讀者のために、順序を追うてこれらの不思議を解かう。  
博士のいふところによれば、『私の架上にある本は、出版者はラシアトルとせず、……「進歩書院發行」……の本である。』すなはち『出版者ラシアトル氏へあてた私信』を卷頭に載せてゐる本でありながら、博士の引用せらるゝものの出版者はラシアトルではない。博士は何故こゝに再び腑に落ち兼ねることを發見されないのか？ もちろん博士の指定さるゝが如き版本はある。しかしそれは確に後のものである。それよりも先きに、ラシアトルの發行したもので

進歩書院版とは印刷所を異にし、且つところぐゝのカットを異にしてゐるところの、假綴の定本が出てゐる。もし言ひうべくんば、これこそ『マルクスの公認した定本としてのフランス譯書であらう。』しかるに何故か、博士は『私が今見つゝある本(進歩書院版)こそ』それだと主張される。

なるほど其の進歩書院版では、第一版の序文の日付が一八七五年七月二十五日となつてゐる。しかし前記のラシアトル版では、序文の内容は一字一句盡く同一であるに拘らず、その日付は一八七七年七月二十五日となつてゐる。そしてそれは正にドイツ原本における第一版序文の日付なのである。私はたゞこの一事を指摘しただけで、福田博士の主張せらるゝ事實——マルクスが一八七五年七月二十七日の日付をもつてドイツ原本への序文とは相違する序文を新たにフランス譯のために起草したといふこと——の全く虚構であることを、讀者が納得せらるゝであらうと信ずる。だが私は今少し説明を加へるであらう。

福田博士の持ち出された進歩書院版には、何故第一版の序文の日付が年號だけ改竄されてゐるか、それは發行者の故意に基づくものか、それとも印刷の際における何等か偶然の誤植に基づくものか、私はそれらのことについて何等確たることを言ひえない。だが、その第一版序文



なるものがドイツ原本第一版の序文の翻譯であることだけは、明かに斷言し得られる。それは一見して分かる。

先づ最初の一句を掲げよう。

L'ouvrage dont je livre au public le premier volume forme la suite d'un écrit publié en 1859, sous le titre de ; < Critique de la réconomie politique. > Ce long intervalle entre les deux publications m'a été imposé par une maladie de plusieurs années. これを直譯すれば次のやうになる。

『私が茲にその第一冊を世に出だす著作は、「經濟學批判」といふ標題のもとに一八五九年に公刊した一著作の續きをなす。この二つの出版の間における斯かる長き距りは、數年間の病氣によつて餘儀なくされたものである。』

これを吾々の譯本におけるドイツ原本第一版の序文と比較せよ。吾々はその最初の一句を次の如く譯出してゐる。

『私が茲にその第一巻を世に出だす著作は、一八五九年に公刊した私の著作「經濟學批判」の續きをなす。初めと續きとの間における斯かる長き休止は、幾度も幾度も私の仕事を中斷したる長き病氣のためである。』

これら二つを比較すれば、もちろん些細の差異をその間に認むることは出来る。しかしそのために二つものを別々のものだと言はなければならぬとするならば、殆んど總ての譯文は原文と別の文章だと言はなければならぬまい。

更に吾々は最後の一句を調べて見よう。一八七五年にマルクスがフランス譯のために新たに起草したものと、福田博士の主張せらるゝ序文の最後は、次の如くである。

Tout jugement inspiré par une critique vraiment scientifique que est pour moi le bienvenu. Vis-à-vis des préjugés de ce qu'on appelle l'opinion publique à laquelle je n'ai jamais fait de concessions, j'ai pour devise, après comme avant, la parole du grand Florentin :  
Segui il tuo corso, e lascia dir le genti !

出來うるかぎり之を直譯して見よう。

『眞に科學的な批判によつて行はれた總ての判斷は、私の歓迎するところである。私の會て讓歩したことのない輿論と稱さるゝものの成心に對しては、これまでの如くこれからも、私は偉大なるフロレンス人の言葉を格言としてもつ。』

汝の道を歩め、そして人々をしてその云ふに委せよ！

再びこれを吾々の譯本におけるドイツ原本第一版の序文と比較して見よう。吾々の譯本一六



頁ではその最後が次の如くなつてゐる。

『科學的批判のあらゆる判断を、私は歓迎する。だが私の曾て讓歩したことのない謂はゆる輿論なるものの成心に對しては、偉大なるフロレンス人の次の格言が、今後も依然として私に妥當する。

汝の道を歩め、そして人々をしてその云ふに委せよ！』

端初と終末との斯かる比較は、福田博士のいふところの『フランス譯文の序文』なるものが全くドイツ原本の第一版の序文のフランス譯に外ならぬことを、明かにしえたと考へる。

しかも博士は、かく考へることは『明かに速斷』で、『兩序文を一見すれば、兩者は決して同一文でないことは、直ぐ知り得られるのである』といふ。なるほど博士の『架上』にあるフランス譯本には年號が一八七五年となつてをり、ドイツ文第一版の序文の年號一八六七年とは明かに相違してゐるのだから、博士はこの年號だけを『一見』して『兩者は決して同一文でない』と早合點されたのであらう。——斯様に讀者は想像されるかも知れない。しかし博士は決して左様な『速斷』をされたのではない。事態はもつと念の入つたものである。

私から見れば博士はづうしくも、天下何萬の讀者に向つて、そのいふところの『フランス譯本第一版序文』なるものの一節を、原文のまゝで引用し、次いでそれに邦譯を加へ、且つ

それに該當する文章は、カウツキー版にも英譯本にも吾々の譯本にもないと言つてゐられる。

これは愈々出でて愈々怪、私は殆んど言ふべきところを知らない。その一帶の文、實に左の如し。

『さて、私が當面の問題とすることに關しては、フランス譯本第一版序文——河上博士の所謂序でない本當の序文——は、此序文の最初に開題文として掲げた原本第一版の序文とは、著く異なるものである。其文左の如し。——此文カウツキー民衆版にも、英譯本にも、河上博士等邦譯本にもなし——』

Dans toutes les sciences le commencement est ardu. Le premier chapitre, principalement la partie qui contient l'analyse de la marchandise, sera donc d'une intelligence un peu difficile. Pour ce qui est l'analyse de la substance de la valeur et de sa quantité, je me suis efforcé d'en rendre l'exposé aussi clair que possible et accessible à tous les lecteurs.

La forme de la valeur réalisée dans la forme monnaie est quelque chose de très simple. Cependant l'esprit humain a vainement cherché depuis plus de deux mille ans à en pénétrer le secret, tandis qu'il est parvenu à analyser, du moins approximativement,



des formes bien plus complexes et cachant un sens plus profond. Pourquoi? Parceque le corps organisé est plus facile à étudier que la cellule qui en est l'élément. D'un autre côté, l'analyse des formes économiques ne peut s'aider du microscope ou des réactifs fournis par la chimie; l'abstraction est la seule force qui puisse lui servir d'instrument. Or, pour la société bourgeoise actuelle, la forme marchandise du produit du travail, ou la forme valeur de la marchandise, est la forme cellulaire économique.

Pour l'homme peu cultivé l'analyse de cette forme paraît se perdre dans des minuties, mais comme il s'en trouve dans l'anatomie micrologique.

A part ce qui regarde la forme de la valeur. la lecture de ce livre ne présentera pas de difficultés. Je suppose naturellement des lecteurs qui veulent apprendre quelque chose de neuf et par conséquent aussi penser par eux-mêmes.

.....Préface de la première édition. pp. 9—10.

〔すべての科學に於いて、始めは骨の折れるものである。(本書)第一章、主として、商品の解剖についての部分は、これを理解するに、少し困難であらう。(其中)價値の實體及び其の分量の解剖に於いては私は、其の説明を出来る丈け明晰に而してすべての讀者が

受け入れ得るように、爲すべく力を盡くした。

貨幣形態に於いて實現せられた價値の形態は、甚だ單純なものである。しかるに、人間の精神は二千年餘り以來徒勞をつくして其の秘密中に、探り入らんとつとめた。しかるに、其れは、兎も角接近的に、遙かにより、複雑な而してより、深い意味を秘くしてゐるところの諸形態を解剖するところまで到達し得たに止まる。何故に? 何となれば有機體中の要素たる細胞を研究するよりも、有機體其ものを研究する方が、より容易いから。他方に於いて、經濟上の諸形態の解剖は、顯微鏡や、化學が供する反應料の助けを藉ることが出来ない。抽象のみが、其補助具として役立ち得る唯一の力である。ところが、現實のブルジョア社會に取つては、勞働の産物の商品形態、又は商品の價値形態は、經濟上の細胞形態である。修養少き人に取つては、此の形態を解剖することは、瑣細なことに己れを忘るゝ底の(徒勞の)如くに見える。無論、其れは、事實に於いて、而して必然的に、瑣細である。乍去、其瑣細とは、微學的解剖に於いて見出さるゝ其れの如きの謂である。

價値の形態に關することを除いては、此書を讀む者は、何等の困難をも感じないであらう。元より、其讀者とは、何物か新しきものを學び、而して、従つて同時に、自分自ら思索せんと欲する讀者を指して云ふものなることは、勿論である。』



此の言は、原本第一版にも第二版跋文中にも見出されず、而して、私が今問題とするところの價值形態、就中、等價形態に關するアリストテレスの「流通正義」論の一部分についての、マルクスの解釋に關して可なり關係の深い發言なのである。其はカウツキーが、資本論の新版に譯掲するに値すると云つて、自ら譯筆を下して其自序中にかゝけた二文よりも、更らに、譯掲に値するものと、私は信ずる。』

さて博士が以上引用されたものは、『フランス譯本の本當の序文』のなかにあるもので、『カウツキー民衆版にも、英譯本にも、河上博士等邦譯本にもなし』とのことであるが、それは完全なる事實の虚構のほかの何物でもないのであつて、實際はその全部が吾々の譯本の九頁から十頁に出てゐるのである。面倒だがそれを茲に轉載して見よう。

『すべて端初は困難であるといふことは、あらゆる科學に妥當する。だから本書の第一章を、殊に商品の分析を含む節を、理解することは、最大の困難とならう。それで私は、價值の實體と價值の大きさとの分析に比較的直接に關係してゐる部分については、その分析を出来るだけ通俗化した。價值形態は——その完成せる姿は貨幣形態であるが——極めて無内容であり簡單である。それなのに人間の精神は、二千年以上も昔から、これを究明しようとして無駄な試みを續けてきた、しかるに他方において、内容のより豊富なより複雑化せられた。諸形

態の分析には、少くも近似的には成功してゐる。何故か？ 成熟體は體細胞よりも研究し易いから。加ふるに、經濟的諸形態の分析にあつたつては、顯微鏡も化學的試薬も役には立ち得ない。抽象力が兩者に代位せねばならぬ。ところでブルジョア社會にとつては、勞働生産物の商品形態あるひは商品の價值形態が、經濟上の細胞形態である。その分析は、素養のない人々にとつては、たゞ徒らに微細な區別立てのうちにくろつくものと思はれよう。なるほどその分析に際しては微細な區別立てを問題とするに相違ないが、しかしそれは顯微鏡的解剖において問題とされるものと全く同じである。

『だから、價值形態に關する節を除けば、本書が理解し難きゆゑを以て責めらるゝ筈はない。もちろん私は、何等か新たなものを學ばんと欲する。従つてまた自から思索せんと欲する。讀者を前提としてゐる。』

これを前掲の福田博士譯と比較すれば、もちろん言葉の上の相違はある。最初の一句は、福田博士譯では『すべての科學に於いて、始めは骨の折れるものである』となつてをり、吾々の譯では『すべて端初は困難であるといふことは、あらゆる科學に妥當する』となつてをる。最後の一句は、福田博士譯では『元より、其讀者とは、何物が新しきものを學び、而して、従つて同時に、自分自ら思索せんと欲する讀者を指して云ふものなることは、勿論である』となつ



てをり、吾々の譯では、『もちろん私は、何等か新たなるものを學ばんと欲する。従つてまた自ら思索せんと欲する。讀者を前提としてゐる』となつてをる。同じドイツ文を譯しても譯者が同じでなかつたなら、譯文も決して完全には一致しえないが、殊にこの場合、福田博士はドイツ文を一應フランス文に譯したのから邦譯され、吾々はドイツ文を直接に邦譯してゐるのだから、譯文の上に多少の相違があることは勿論である。しかし博士の邦譯されたものが吾々の譯本に見付からないといふほど、それほどまでに相違してゐるのではない。もしそれをしも見付からないといふならば、それは外國人の著書をいゝ加減に抄譯して之を自己の研究になる勞作なりと稱して公刊しうる人のみが言ひうることである。驚くべきことである。

これを要するに、マルクスが一八七五年に『わざ／＼起草した』フランス譯本への『本當の序文』と、福田博士の稱するところのものは、實はドイツ原本第一版への序文に外ならぬのである。博士はいふ、『カウツキーは、この序文（博士の謂はゆるフランス譯への本當の序文——河上）のことを、その民衆版序中に言つて居らぬ（！）……彼は右の私信（吾々がフランス譯への序文となしたもの——河上）と、後にあぐる「讀者に告ぐ」とは、ドイツ文序文と並んで、資本論の向後の版に掲げる値ありとは云つてゐるが、それよりも遙かに重要な此の本當の序文を重刷する必要のあることについては、一言もしてゐない（！）。』一言もしてゐない筈だ、ドイツ文をフラン

ス文に譯したものを更にドイツ文に譯して重刷する馬鹿があつてたまるものか。『而して河上博士等も全く同様である。』然り、吾々はすでにドイツ文の第一版序文を日本語に譯して掲載してゐるのだから、それと同じもののフランス譯を更に日本語に譯し、結局は同一なるべき譯文を重複して掲載するが如き愚をなしえないからである。しかもその故をもつて、吾々は福田博士から『不正確、不詮索、または不親切』の非難を受けてゐる。私が遂にこれを黙過するを得ざることを、讀者は恐らく諒とせらるゝであらう。

博士は吾々に質問されてゐる、『河上博士等が……彼れ（マルクス）の公認した本當の序文を譯出してないことは、何の理由に基くものであらうか』と。私はかゝる質問を提起せらるゝ博士の頭腦の健康状態を疑ふ。

さて私は實につまらぬ争ひのために時間を費して來たが、しかし一面から見れば、私が以上の事實を明かにしたことは、決して無用ではなかつたと信ずる。——それは現在の學界が如何に混沌たるものであるかを證明すると同様に、反動學者のいふところは、その人が如何に博識であり如何に才智に長けてゐるようとも、結局如何に信用しがたきものであるかを暴露することにより、彼等に對する民衆の信用を破壊するための有力な材料となるであらうから。



フランス譯の冒頭に載つてゐる同じフランス文を捉へて、福田博士はそれがドイツ原本第一版の序文と同一文でないことは、『兩序文を一見すれば直ぐ知り得られる』といふに對し、私はそれと全く逆に、それらが同一文であることは、一見すれば直ぐ知り得られるといふ。議論が分れるものならまでも、事實の認定が此の如く相反するといふことは、反動學者の眼と吾々の眼とが今や事物の觀察において徹底的に相反するに至つたことを示す。同じ物を指して、博士は黒でなく白だといひ、私は白でなく黒だといふ。學界の混沌はすでに極に達したといふべきである。鬭争者は能ふかぎりの對立をなしたといふべきである。残念なことには、資本論のドイツ文第一版はもちろんのこと、最初のフランス譯も、今日では容易に手に入れがたい。何萬何十萬といふ天下の讀者は、果して福田が正しいか、河上が正しいかを、判斷すべき何等の材料を有たぬ。それに附け込んで、章魚の墨汁を吐くが如くにして、學界を混沌化せんとすることが、實に反動學派の窮餘の一戦術なのである。

對立者の何れが事實を事實とするか？ 眼あるものは見よ。

土方博士、福田博士、これらの學者は何れも常に事實に即したる實證的な研究、歴史的な研究乃至は考證的な詮索を重んずる學者である。諸君の勞作は、一見したところでは、まことに事實を重んずるかの如き現象形態を呈してゐる。茲に掲げた福田博士の論文はもちろんのこと

土方博士の『マルクス價值論の排撃』でも、その巻頭には多くの頁がマルクス價值論の解説のために割かれてある。しかし如何にも事實を重んずるかの如き斯かる現象形態は、逆に事實の虚構をその本質となしてゐる。

今や白晝公然、學問の名において、黒が白とされてゐる。

吾々の近頃譯出した資本論第二分冊の二二〇頁の脚註には、マルクスがシェクスピアの『アセンスのタイモン』から引いた次の句がある。

『黄色い、ぎら／＼する、貴重な黄金だ！』

……こいつがこのくらゐありやア、黒も白に、醜も美に、

邪も正に、賤も貴に、老も若に、怯も勇にすることが出来る。……』

黒を白にするのは、この『ぎら／＼する貴重な黄金』のみかと、私は思つてゐるが、商品生産が資本論第一篇の階段に止まらず、資本論自體でさへが商品化したる今の階段では、何物かが福田博士をして黒を白となさしむるの力を有するかに見える。この力が博士をして、ドイツ原本第一版の序文のフランス譯を、マルクスがわざ／＼フランス譯のために新たに起草した別種の序文となさしめたのである。たゞ吾々はかゝる力の外に獨立する。微力にして淺學なりといへども、敢て大衆に向つて『眞實』を語らんとするの意氣を維持しうるゆゑである。私は



竊にこのことを光榮とする。

なほ福田博士はいふ、『河上博士等は、或はカウツキーだけを見て、實物を見ぬために云々』  
『それほどの深い意味はなく、實物を見ず、單にカウツキーの不精密な敘述を、そのまゝ受け  
入れられた』云々。すなはち博士は、吾々がフランス譯の『實物』を見たか見ないかを、しき  
りに氣にしてゐられるやうである。私はそれについて尙ほ一言を費さう。

資本論の舊フランス譯は、相當な珍本ではあらうが、しかしそれは福田博士の獨占物でなく、  
獨占物ではありえない。現に一兩年前、京大社會科學研究會の主催で圖書展覽會が行はれた時  
にも、それは數種陳列された。私の知つてゐるだけでも、今日京阪地方には、六人の所藏者が  
ある。大學の教員では恐らく最も藏書に乏しい一人であらう私ですら、幸に一本を藏してゐる。  
そして欄外に第一分冊としてある表紙には、一八七三年十二月三十日の日付で、パスカルに宛  
てたマルクスの筆蹟が残つてゐる。もちろんそれには、福田博士のいふところの・マルクスが  
一八七五年に『わざ／＼起草して』フランス譯への『本當の序文』となしたものが、——進歩  
書院版のそれと一字一句も違はずに——ちやんと載つてゐる。それが決して七五年に起草した  
ものでないことは、この一事からでも證明されよう。ひそかに思ふに、少くとも經濟學界にあ

つては、日本一の文獻學者であり、日本一の藏書家であり、現に『アリストテレス關係文獻  
の冊子も百五六十種』を藏してゐられる福田博士のことであるから、博士自身も、その引用さ  
れた進歩書院版のほかに、ロシアトル版をも所有してゐられるに相違ない。私は博士が門弟を  
して今一度その豊富なる『架上』を調査せしめられんことを希望する。

そしてもし博士がこのロシアトル版をさへ調査するの勞をとられたならば、その扉の欄外に  
Prix de la Livraison : dix centimes (分冊定價十サンチーム)なる文字と、1<sup>re</sup> Livraison (第  
一分冊)なる文字とあることを發見せらるゝであらう。また、たとひ欄外の文字は見落すも、  
各分冊が十サンチームの定價であつたことは、巻頭にあるロシアトルの文に明記するところ  
である。私はこの十サンチーム——今の日本の貨幣に直ほして四錢——といふのから、分冊は吾  
々の譯本程度のものであらうと、漠然考へてゐた。それで『邦譯への序言』には『この書のフ  
ランス譯がこの日本譯と同じやうに分冊で發行され云々』と書き、また第二分冊の附録にした  
『解題』では『フランス譯がこの日本譯と同じ程度の小分冊として出版され云々』と書いた。  
しかし福田博士の文章に接してから、も少し詮索してみる氣になつた。その結果考へついた  
ことを、序ながら茲に書き誌すであらう。

福田博士は『パンフレット本を見る稀有の幸福を有せらるゝ如く見ゆる河上博士等』と言つ



てゐられるが、吾々はかゝる『幸福』を——別にそんなことが幸福だとは思はぬが——有つたとも有たぬとも言ひ兼ねる。といふのは、私がこれまで見たものは何れも合本になつてをり、且つそれには巻頭に第一分冊の表紙が綴ぢ込まれてゐるに止まるからである。しかしラシアトルの發行したまゝの合本と推定されうる假綴本を見るに、それには前記第一分冊の表紙が扉とされてゐる上に、それと同じ意匠のものがそのまゝ（但し欄外の『第一分冊』とか『一分冊定價十サンチーム』とかいふ文字だけは削つてある）表紙の第一面に印刷されてある。そして表紙の第四頁には、ラシアトルの著した *Histoire des Papes* の廣告が載つてゐるが、それを見ると、この書の定價は全體で二十七フランであるけれども、やはり分冊にして發賣されてをり、定價表のところには、一 livraison 十サンチーム、五 livraisons からなる série は五十サンチームなどとしてある。そしてその livraison といふのは八頁のもので、毎週二回發行するとしてある。そこで私は、マルクスの資本論も恐らくこれと同じ程度——すなはち四ツ折版八頁つ——の livraison として發行されたものであり、従つて各 livraison には最初から表紙は付いてゐなかつたものだらうと推定するのである。

この推定を助くる事由が今一つある。一八七七年に發行されたフランスの圖書目錄 (*Lorenz, Catalogue général de la librairie française*) を見るに、それには資本論フランス譯の定價を五フランとしてある。またフランス譯の資本論そのものの巻尾についてゐる進歩書院の廣告にはこの書の定價を六フランとしてある。何れにしても全體の定價は五フラン乃至六フラン程度のものであつたらうと察せられるが、もしさうだとすれば、定價十サンチームの一分冊は、全體の何十分の一に相當すべき筈である。ところでフランス譯は全部三五二頁から成つてゐるから、これを八頁つゝの分冊とすれば、四十四分冊になる。すなはち一分冊十サンチームとすれば、全體が四フラン四十サンチームになり、前記の合本定價にほど近きものになる。

私は以上の如き理由から、最初のフランス譯は、恐らく四ツ折版八頁つゝ——細字二段組みになつてゐるから、八頁でも可なりの内容を含む——讀者に配布され、表紙は第一回の配布の際にのみ附せられたものであらう、と推定するのであり。そしてもし此の推定が事實にあつてをれば、吾々が『この書のフランス譯がこの日本譯と同じやうに分冊で發行され云々』と書き、また『同じ程度の小分冊として出版され云々』と書いたのは、たしかに正確だといふことになる。すなはち同じ分冊でも、吾々の譯本は第一章の終りまでを一分冊としてゐるが、フランス譯ではそれが四分冊になつてゐたのであらう。かゝる『不正確』を私自身が承認することによつて、福田博士の考證欲が幾分なりとも満足されるであらうならば、私も満足に思ふ。



なほ博士は、吾々がフランス譯の卷末に出てゐる『讀者に告ぐ』といふマルクスの一文を譯出せざりしことにつき、疑惑をさしはさまれた。けだし右の一文には、譯文に對するマルクスの改修は『譯書が定期分冊で刊行されたがために、それ〴〵時を異にしてなされ、従つて不均整なる注意をもつて遂行せられた、而して、文體の諸々の不調和を生ずることを免れ得なかつた』（福田博士譯文）といふ文字がある。これは、博士の言葉によれば、マルクスが『分冊刊行の缺點を公認してゐる』ものである。しかし河上等が之を『譯出してないことは、何の理由に基づくものであらうか。只管に最廉價云々をマルクスの遺志と忖度し、その一事を高唱せんために、分冊刊行の他の方面すなはち其缺點に關するマルクスの公言を、殊更に削り取つた一種の周到なる用意のためであらうか。とにもかくにも初めに分冊刊行を喜んだマルクスは、終りには其れより生じた他の缺點を公認してゐることは、河上博士等によつて省略に附されてゐるに拘らず、明白なる事實であるのである。云々』——博士は此の如く言はれてゐるのである。

右の文中『一種の周到なる用意云々』は恐れ入る。吾々は自分たちの仕事の缺點を隠蔽しようとする意圖を毫末も有つてはゐない。翻譯が出来上がるに従つて印刷に附してゆくことには恐らく種々なる缺點が伴ふであらうし、それらの缺點は全部完結の上で更に訂正するであらう。しかし何れにしても、前記の『讀者に告ぐ』の一節は、『初めに分冊刊行を喜んだマルクス』が

終りにはそれを非とするに至つた、といふわけのものではない。早い話が、高島氏の資本論邦譯はすでに全部出来上がつてゐるのだから、これを十錢づゝの小冊子に細分しようが、一圓づつの本に纏めようが、それによつて譯文が相違してくる筈はない。すなはち翻譯が『時を異にしてなされ、従つて不均整なる注意をもつて遂行される』ことに缺點が伴ふといふことは、それ自身としては、資本論が定價の安い小分冊に細分されることを『喜ばない』理由になるのでは決してない。

博士が『マルクスの公認した定本』と稱される進歩書院版にも、『資本論の翻譯を定期分冊で出版するといふ貴方の考へを私は喜ぶ』といふ文字が、依然として存されてゐる。資本論の日本譯が吾々の譯本の如く定價二十錢の小分冊になつてゐることを、たとひ喜ばない人があるにしても、それは地下のマルクスではないことを、吾々は今もなほ確信する。

前文の植字校正を終はれる後、『改造』第十卷第一號（昭和三年一月發行の日付を附せるもの）を手にし、福田博士の續稿を一見するに、それは次の如き一節がある。序ながら之も讀者に紹介しておかう。（傍點は原文のまゝ）

『三木氏の文にヒントを得て河上博士等の譯本を、再度手にした私は、其の序文中に、三木

終りにはそれを非とするに至つた、といふわけのものではない。早い話が、高島氏の資本論邦譯はすでに全部出来上がつてゐるのだから、これを十錢づゝの小冊子に細分しようが、一圓づつの本に纏めようが、それによつて譯文が相違してくる筈はない。すなはち翻譯が『時を異にしてなされ、従つて不均整なる注意をもつて遂行される』ことに缺點が伴ふといふことは、それ自身としては、資本論が定價の安い小分冊に細分されることを『喜ばない』理由になるのでは決してない。

博士が『マルクスの公認した定本』と稱される進歩書院版にも、『資本論の翻譯を定期分冊で出版するといふ貴方の考へを私は喜ぶ』といふ文字が、依然として存されてゐる。資本論の日本譯が吾々の譯本の如く定價二十錢の小分冊になつてゐることを、たとひ喜ばない人があるにしても、それは地下のマルクスではないことを、吾々は今もなほ確信する。

前文の植字校正を終はれる後、『改造』第十卷第一號（昭和三年一月發行の日付を附せるもの）を手にし、福田博士の續稿を一見するに、それは次の如き一節がある。序ながら之も讀者に紹介しておかう。（傍點は原文のまゝ）

『三木氏の文にヒントを得て河上博士等の譯本を、再度手にした私は、其の序文中に、三木



氏のとほ、趣きを異にしては居るが、其の所謂「綿密」又は「正確」なるものについての面白い一例を見出した。博士等は「マルクスは、或意味において文字の末梢にまで神経の敏感性を有し（中略）試にこれをこの第一分冊の範圍についていへば、例へば *abstrakt menschliche Arbeit* といふ場合に *abstrakt* を *abstrakte* とするのではないのは、たゞ、e 一文字の差であるけれども、そこには、方法論上重大な意義（!）が——形式論理における抽象との區別が——含められてある。これをただ抽象的人間的労働と譯出するが如きは、原著者の用意を全く看過することになる」云々と云つて、高島本に「抽象的人間労働」としてあることを明示はしてないが暗に非難して、高島譯は、此の方法論上の重大な意義を無視し、マルクスの用意を全く看過したものなるを諷してある。但し博士たちは、高島本を眼中には置かぬと辯ぜられるであらう。其は御隨意として置く。三木氏の「方法上の誤謬」河上博士たちの「方法論上の重大な意義」など、など、「方法論」若し靈あらば、斯くも、屢々安價な禮讚祭祀を浴せかけられることを、迷惑千萬に感ずるであらうと考へられる。兎に角、我々「方法論」に無學無知な非哲學的俗學者流は、かくして、何度も、膽を寒からしめる。

『しかし、河上博士たちのあげた此場合は、別に「方法論」の御神體を開帳する必要の少しもない、極めて簡單明瞭な事柄に屬するのである。其れは、ドイツ語第一年生すら周知であ

るべき筈の文法上の事柄たるにすぎないのである。此の場合の *abstrakt* は *manschlich* といふ形容詞を形容する副詞である。而して、此の如き場合、其副詞は、毫も語尾變化を被るものでないことは、第一年生もこれを知つてゐるべき筈の些細事——重大事でない——である——尤も、ドイツ語のみならず、英佛伊語は勿論、言語系統の著しく異なる露語でも、比較の *Steigerung* の場合には、副詞は、全體變化を被むる。例へば……（いゝ）にあるロシア語の講釋を省く——河上）……マルクスが *abstrakt* を變化させないのは、單に、文法上の規則に従つたもので、方法論上重大な意義などを少しも有たぬのである。若しも然らずして、*abstrakte* と書いたなら、其れは、「労働」を形容する形容詞であつて、「人間的」を形容する副詞ではないことに、當然なる丈けのことである。

『然るに、河上博士等は、此の簡明な一句を「抽象性における人間の労働」と譯出して、「かかる冗長なる譯語に書き替へることは、たしかに不手際に相違ないが、吾々はウォーレスのヘーゲル譯に倣ひ（!）、己むをえざる場合には、必ずしも原文の字數や語數などに頓着せず、むしろ偏へに原意に、忠實ならんことを努めたのである」と、事々しく説明して居られる。此れ丈けを承ると、河上博士たちの敏感性、正確性は、實に高島本などの夢にも思ひ及ばざる驚く可き斗りのものであつて、「自から其の新譯を要する所以を明かに」し、其れと共に、



日本語なるものは、斯くも不手際な譯出方をしか許さぬ、憐れ千萬な語らしく見へる。しかし、私は左様は思はない。イクラ日本語が貧弱なものであらうとも、副詞を副詞として譯出することの出来ない程甚しいものだと思へられない。右の一句は、「抽象的に人間的な労働」又は「抽象的人間の労働」とでもすれば、原意は、誤なく傳へられる様に感ずる。殊に、博士たちの様に、小黑丸を惜氣もなく使用するとすれば「抽象的・人間的労働」は、「抽象的」が形容詞なる場合と定めて置けば、其れと、混同誤解される虞はなかるべきではないか。否、斯くの如き詮索立てても、河上博士たちの言があるからのもので、實を云へば、其れ丈の敏感性はマルクスは、他國語への翻譯に於いて、必ずしも要求しては居らぬのである。其證據は、マルクス公認のロア氏フランス譯には、右の一句は、極めてアツサリと、*le travail humain abstrait* となつてゐる。即ち、抽象的は、必ずしも、*humain* にかゝると云へず *travail* にかゝると見ても差支ないのである。若しフランス語で、河上博士流に、綿密に、原文を出さうとなれば *le travail abstraitement humain* とすべきであつたらう。マルクスが、左様させてないところを見ると、一文字の有無の方法論上の重大なる意味云々、は自ら噴飯し出すではあるまいかと思はれる。河上博士たちの敏感性は、茲ではあわれ、マルクス自らによつて、嘲られた如くに見へるも、笑止とこそ申すべきであらうか。兎角ロア譯と高島譯

との間には、何等方法論上重大な相違の横はつて居らぬこと丈は、明々白々なことである。』右の一文に關し、私が讀者の注意を乞はんとするところは、福田博士が『ドイツ語第一年生もこれを知つてゐる』文法だけを持ち出して、それ以上の文法に對する無智を装つてゐられる點である。博士の説明さるゝところによれば *abstrakt menschliche Arbeit* といふ場合の、『*abstrakt* は *menschlich* といふ形容詞を形容する副詞』であり、それゆゑに『その副詞は毫も語尾變化を被つてゐない』といふのである。

しからば博士に問ふが、『抽象的に人間的な』とは、どんな風に人間的なのであるか？ マルクスの考によれば、『抽象的に人間的な労働』があつたり、『具體的に人間的な労働』があつたりするののか？

博士の言はるゝところによれば、この場合『*abstrakte*』と書いたなら、それは労働を形容する形容詞』であつて、意味は違つてくることであるが、しからばマルクス自身が、資本論第一版の附録『價值形態』において *abstrakte menschliche Arbeit* と書いてゐるのは、どう解釋されるのであるか？

必ずしも第一版の附録に廻る必要はない。今日のカウツキー版によれば、その三九頁にも、*abstrakte menschliche Arbeit* といふ文字が出てをり、一五四頁には *abstrakte gesellschaftliche*



Arbeit」といふ文字が出てをる。しかもそれが總て *abstrakt menschliche Arbeit* と全く同じものを指すことは、何人にとつても疑ひあるまい。

しかも福田博士流にこれを『ドイツ語第一年生』の文法だけで讀むと、『抽象的』が或る場合には『人間的』の形容となり或る場合には『労働』の形容となり、全く意味が違ふことになる。しかしそんな馬鹿なことは勿論ありえない。

そこで『ドイツ語第一年生』以上の文法が必要になる。これをマルクスの用ひてゐる周知の語に例をとれば、カウツキー版三五頁に出てゐる *sinnlich übersinnliches Ding* を見よ。これも第一年生の文法によると、*sinnlich* は *übersinnlich* を形容したことになる。しかし『感覺的に超感覺的な物』といふことは、何人にとつても意味をなすまい。

『第一年生の文法』以上の文法によると、かゝる場合には、『感覺的』も『超感覺的』も共に『物』を形容するのである。たゞ感覺的であると同時に、しかも超感覺的であるといふ意味を強めるために、前へ出てゐる *sinnlich* には語尾變化を加へないのである。

文法的には *abstrakt menschliche Arbeit* も斯かる用例に屬するものだらうと私は考へる。

福田博士の講釋せらるゝところは正に逆に、『抽象的』も『人間的』も共に『労働』を形容するのである。だが抽象的労働は即ち人間的労働だといふ意味が、そこには強く含められてゐる。

のである。この場合 *abstrakt* は『捨象的』と譯した方が適當であつたと今は考へるが、つまり色々な具體的労働から具體性を捨象したものが捨象的労働であり、そしてそれは同時に人間的労働なのである。——特殊的な個別的な個人的な労働に對立する意味においての、一般的な平均的な人間的な労働なのである。

だから *abstrakt menschliche Arbeit* は『捨象的であると同時に取りも直さず人間的である労働』とでも譯すべきであるかも知れない。それは、*sinnlich übersinnliches Ding* を『感覺的に超感覺的な物』と譯しては全くの誤解であり、また『感覺的超感覺的な物』と譯しても意味は通ぜず、従つて日本語としては己むを得ず『感覺的なしかも同時に超感覺的な物』といふ風に冗長な譯出の仕方をしなければならぬのと、同じことである。この場合には『日本語なるものは、かくも不手際な譯出方をしか許さぬ、憐れ千萬な語らしく見える』のも己むを得ない、——もしそんなことが『憐れ千萬』であるに値するならば、吾々が *abstrakt menschliche Arbeit* を『抽象性における人間労働』と譯出したのは、マルクスが他の場合には（例へばカウツキー版一〇〇頁を見よ）これを *menschliche Arbeit in abstracto* といつてゐる精神を採つたのである。吾々は決して吾々の試みたこの譯語を固執しようといふのではない。たゞ第一年生の文法からのみ見たならば間違であるかの如く見えても、それは決してマルクスの根本精神を殺して



はるないといふだけのことを附記しておく。

福田博士は更にいふ、『マルクス公認のロア氏フランス譯には、右の一句は極めてアツサリと Le travail humain abstrait となつてゐる、即ち抽象的は必ずしも humain にかゝると云へず travail にかゝると見ても差支ないのである』と。差支ないどころか、それは正に『労働』にかゝるのだ。『必ずしも「人間的」にかゝると云へず』どころか、『人間的』にかゝつてはならぬのである。

『それだけの敏感性は、マルクスは、他國語への翻譯において必ずしも要求しては居らぬのである』は滑稽である。そしてその證據に『マルクス公認のロア氏フランス譯』を持ち出すに至つては『ます／＼滑稽である。なぜなれば、前にも一言したやうに、資本論の原本そのものゝ中に abstrakte menschliche Arbeit なる言葉が現に見出されるからである。』

要するに、『ドイツ語第一年生』の知つてゐる文法を楯にして資本論を讀まうとすると、『抽象的』が『人間的』を形容することになり、abstrakt menschliche Arbeit の一句は『抽象的に人間的な労働とでもすれば、原意は誤なく傳へられるやうに感ずる』といふ馬鹿け切つた話になる。そんな讀方をしては、マルクスのいふ價値の實體は全く理解できず、従つて資本論全體が全く理解できぬことになる。しかも此の如くにしてマルクスに對する眞の理解を妨げんとする

ところに、正に反動學者の重大な社會的任務(?)がある。資本論の翻譯に對する批評ですら、今日はすでに政治的意義を有する階段に進んだのである。

福田博士の文法が『ドイツ語第一年生』の文法に限られてゐる筈はあるまい。思ふに、この際高等文法の無智を装ふことが、何萬といふ多數の讀者に對しては、博士のため却て便宜でもあつたのであらう。驚くべきことである。

博士はいふ『我々方法論に無學無知な非哲學的俗學者流は何度も臆を寒からしめられる』と。時正に寒に向ふ、敢て博士に望む、幸に暖をとりて自愛されんことを。(十二月二十三日追記)

(一九二七年——昭和二年——十二月發行『社會問題研究』第八十四冊所載)



## 我國における歴史學派の擡頭

ドイツの歴史學派は、最初イギリスの正統學派に對抗せねばならぬ事情——當時のドイツにおける新興ブルジョア階級の特異なる歴史的事情が規定したところの一の實踐的要求——から起り、後にはマルクス學派に對抗するために、理論一般を否認することにより、依然として重要な實踐的役割を演じたものであり、演じつゝあるものであるが、最近我國においても、マルクス學派に對する對抗の意味において、——研究者自身がこれを意識すると否とに拘らず、客觀的には斯かる社會的意味を有つものとして、——同じやうなる歴史學派の擡頭を見る。

昨年（一九二六年）十二月發行の『經濟往來』には、昨年度の我國經濟學界に對する三人の大學教授の感想文を載せてゐるが、この三人の方々の文章に期せずして同じやうなる空氣の漂ひつゝあることは、計らずも私の注意をひいた。

東京大學の本位田（祥男）教授は、『近來日本の社會科學において、歴史的、研究の旺盛なことは、著しい事實である。殊に經濟史に於てさうだ』といふ句を以て、その文章を始めて居られ

る。京都大學の黒正（巖）教授も、その文章の冒頭に、『經濟史の研究、殊に日本經濟史の研究が茲二三年來著しく盛になつたことは、吾々經濟史研究者にとつて喜ばしいことである計りでなく、日本獨特の經濟學、社會學の建て直ほしのために最も好都合のことである』と述べて居られる。この『日本獨特の經濟學』の建設といふことは、社會民衆黨の日本主義、現實主義と全く同じ社會的根據から生まれる觀念形態であると、私は竊に考へてゐるが、それとほゞ同じ意味のことを、東京大學の河津（暹）教授も、その文章の冒頭に述べて居られる。曰く『經濟學徒としての私の希望は、一日も早く我國の經濟學を樹立することでありませぬ。我國が泰西の經濟學を輸入して約五十年になるゆゑ、もはや翻譯的、概念的解釋時代を脱して、我國獨創の經濟學を建設すべき時代になつてもよいと思ふのであります、云々。』吾々はこれらの文字に接する時、全くフリードリヒ・リストやキルヘルム・ロッシアなどの再生産されつゝあることを感ぜずにはゐられない。私は斯かる提唱を以て、當事者の意識せらるゝと否とに拘らず、その社會的根據をマルクス學に對する對抗の意義に置くものと考へる。

およそ一定の理論を否認するには、二様の態度があり得る。一は別種の理論を建設することにより之を積極的に否認せんとする態度であり、一は總じて理論そのものを否認することにより之を消極的に否認せんとする態度である。現在の經濟學界においてマルクス學に對抗するも



のは、オーストリアを中心とする心理學派と、ドイツを中心とする歴史學派とであるが、心理學派は第一の態度に出で、歴史學派は第二の態度を採れるものである。前者は極端に非歴史的であつて、その説くところの理論はあらゆる社會形態に共通な規定を基礎とするものたるに反し、後者は極端に歴史的であつて、たとひ理論の可能を認むるにしても、わづかに各國特有の理論を認むるに過ぎざる點において、兩者は外形的には相對立せざるが如き現象形態（例へばメンガーとシュモラーとの論争）を取るけれども、しかし資本家社會の成立、發展、没落の法則——その基礎的法則としての勞働價值説——を否認することにより、總じて資本家社會の理論的分析を妨ぐる點においては、全くその本質を一にするのである。なぜなれば、心理學派はたとひ理論を説くにしても、その謂ゆる理論なるものは、——例へば、過去の生産物にして將來の生産に役立つもの、即ち生産手段一般を、資本と名づけるといふやうに、——一切の歴史的特性を抽象したる、あらゆる社會諸形態に共通なる規定を以て、その出發點とするのであるから、それによつて現實の歴史的な生産階段たる資本家社會が理解され得る筈はない。それは此の派の造り出した『理論』が現實社會の最も重要な諸現象——資本蓄積、過剰人口、獨占、恐慌、等、等、——を説明するに全く無力であることによつて、事實の上に證明されてゐる通りである。また歴史學派は單に具體的な歴史的事實の蒐集に力を注いでゐるのだが、此の

如き表面的經驗的事實の單なる集積から理論の獨りでに生れ出る筈はないのだから、事實彼等は何等の理論をも有たぬのである。殊にシュモラーを黨首とせし新歴史學派に至つては、その舊歴史學派と相違する點が、——シュモラー自身の言葉によれば、——『一般化することより急がないといふこと、個々の時代、個々の國民と個々の經濟状態との特殊研究に通ずるため、廣く涉獵されたる事實の集大成に對し、より強き欲求を有つ』といふことに存するのであり、『この學派の先づ要求するところは、經濟上のモノグラフィ（特殊論文）であり、この學派は、國民經濟全體や一般的世界經濟やの生成徑路よりも、むしろ先づ、個々の經濟制度のそれを説明するであらう』といふのだから、この派に屬する人々は、いよ／＼以て資本家社會の成立、發展、没落の過程の理論的把握から遠ざかりつゝあるのである。たとひ事實の蒐集は理論を發見するための基礎工事であると主張してゐるにしても、實際には理論の樹立を遠き將來に追ひやることにおいて之が否認の實際的役目を演ずることは、恰も或る一派の實際運動家が口には資本家社會の改造を高らかに唱へながら、同時に他方においては、その目的の實現を不可能ならしむるが如き條件のもとに其の運動を繫縛することにより、社會變革の實現を遠き將來に追ひやるための實踐的役割を演じつゝあると同じである。要するに、心理學派も歴史學派も、共に眞の理論を——資本家社會の成立、發展、没落の過程の理論的把握を——回避する



點においては、全くその本質を同じくするのである。たゞ前者は『理論』を有すと意識するがゆゑに、例へばボーム・パウエルクの如く、(日本においては小泉教授が彼とほゞ同じ説を唱道されたことは、讀者の知らるゝ如くである)、積極的にマルクス學を攻撃するの態度に出づるに反し、後者はその無理論性のゆゑに、かゝる積極的態度に出でず、むしろ理論的鬭争を回避すること(これと同じ態度は非マルクス主義の實際運動家の間にも起る)を、その特徴となせる點が、相違せるだけである。

河津教授が『我國獨創の經濟學』の建設さるべき『氣運が動きつゝあり』と觀察された事由の中には、『我國の經濟事情を、通俗的には相違ありませんが、説明せられ、解説せられた著書が踵を接して出づること』、『我國の經濟事情を學理的に説明し批判した著書が多く出版せらるるようになったこと』、『本年度に公にされた著書の中では、本邦の經濟事實を可成り多く取り入れられたものが多くあること』、『比較的狭い範圍の問題を稍々深く細く説明し論評した著書も少からず出版されたこと』等が列擧されてあるが、——さうして念のため附言しておくが、私自身も決してこれらの特殊研究を價値なきものとするのでは斷じてないが、——しかしこれらが果して『我國獨創の經濟學』の建設を齎すべき『一種の光明ある氣運の動き』であるか何うか、私は疑はざるを得ぬ。もしそれが何等かの『氣運の動き』を示すものであるならば、私

はむしろ、エンゲルスまたはレーニンの言つた『樹を見て森を見ざらんとする』氣運の動きではあるまいかと思ふ。

本位田教授は『日本の最近の經濟史研究にも、唯物史觀の流行が可なりな役割を勤めてゐるだらう、それはマルキシズムの流行と同時にあることによつても察せられる』と述べて居られるが、私もさうであらうと思ふ。だが、教授がすぐ續いて述べてゐられるやうに、『歐洲と同じく、世人から所謂マルキストと稱せられてゐる人々の中からは、殆どその研究(日本の經濟史に關する研究)は發表されてゐない。』言ひ換へれば、『近來日本の社會科學において歴史的研究の旺盛なこと』は、マルクス學に對する反動の學的現象である。

この間の消息を最も露骨に示されたものは、黒正教授の次の文章であらう。

『目下の歴史研究家の狀勢を以てすれば、久しからずして從來の翻譯的經濟學社會學乃至は一般社會科學の行詰を打開し、日本人固有の文化に即した眞物の新しい社會科學が生れ出て來る事は、私の信じて疑はぬ所である。所謂歴史學派の研究態度は方法論上から云ふて種々の問題も起らう。併し今日の我國社會科學の領域に於ては、先づ何よりもさきに歴史學派的方法の採用を必要とする。凡べての社會生活に於て數千年間特異な様式をとつて發展し來つた日本の研究には、西洋の空な觀念的な哲學論はあと廻はしでよい。』



\* 『經濟往來』大正十五年（一九二六年）十二月號、一〇四頁

『……一方では若い經濟學史家がそれ／＼独自の立場から部分研究をやつて大きな屋臺骨の基礎工事に着手して居る。一派の人々は之等の部分的な研究に對して、楊子で重箱をほちくするものだとか、方法論がどうだのと自分では少しも事實の集約的研究をしないで悪口雜言をして原稿料を稼ぐ様な手配も出て來た。併し之等の寄生蟲的批評家が存在し得るの餘地があつたり、學問上の暴力團の跋扈しうる事夫れ自體が、日本の經濟學界の發展しつゝあること、研究領域の廣大なる事とを意味するものであつて、ある意味からいへば却て慶賀すべき事である。色々の議論もあらうが、我々は經濟史の部分的研究を充分にしなければならぬ。我々の部分的研究は遂に部分的研究に了るものではない、より高い意義を胚胎する部分的研究である。唯物史觀は歴史研究の立場の一樣相にすぎないのに、之を經濟史と混同したり、唯物史觀の立場から研究しなければ經濟史でないと考ふる人も仲々澤山にある日本の經濟史學界である。部分的研究だといつて罵詈されても決して恥しくない。それは却て今の學界では譽だ、甘じて學界の人柱となるべきであらう。この人柱とならんとする多くの學徒は靜かに研究をつゞけて居る。見よ、本年一月以降、史學の諸雜誌、經濟學の雜誌、その他一般社會科學の雜誌に於て汗牛充棟も嘗ならざる程多くの經濟史的勞作が現はれて來た。……今や日本

の經濟學界は往年獨逸に於ける歴史派勃興の時代と同じ様な感がする。……我々經濟史研究に加はるものは、日本歴史派の確立に精進するの覺悟が必要である。』\*

\* 同上 一〇六頁

この氣焔のうち、教授は、『歴史學派』の特徴を——その意圖と傾向と *Gefühle* と *Stimmungen* とを、遺憾なく示して居られる。『歴史學派の研究態度は方法論上から云うて種々の問題も起らう』が、『數千年來特異な様式をとつて發展し來つた日本の研究には、西洋の空な觀念的な哲學論はあと廻はしでよい』、『我々は經濟史の部分的研究を充分にしなければならぬ』と主張せらるゝが如き、また『學界の人柱』を以て任せらるゝが如き、特にさうである。吾々は勿論かゝる特殊的研究を必要とし且つ歡迎するものであるが、しかし最近における歴史學派の擡頭については、吾々はまた、おのづから諸家と別種の解釋を取らんとするものである。

（九二七年——昭和二年——二月發行『社會問題研究』第七十七冊所載）



## 學生檢學事件について

—和辻哲郎氏に寄す—

私は、過日あなたが『京都帝國大學新聞』(大正十五年九月二十一日號)に公にされた『學生檢學事件所感』について、少しく私の所感を述べたく思ひます。私がこれを茲に問題とするに至つたのには、種々の理由があります。その第一は、あなたの所感が多くの人々に或る有力な印象を與へてゐるといふことです。私はそれを個人的な會話において知ることが出来ました。多くの人々がそれを話題として私に持ち出しました。勿論その態度には正反對な二つの種類がありました。一はあなたの見解を以て極めて穩當な説となすものです。この部類に屬する人々は、あなたの言はれたことを以て正に自分の言はんとする所であると考へてゐるか、さもなければ、あなたの言はれたところによつて自分の考を確立したかに思つた人々で、私の感知した範圍では、それが大多數を占めてゐると思はれました。二はあなたの見解を甚だしく不穩當だとするもので、私は無論これに屬するのですが、最近に同じ大學新聞に出た小林輝次君の『哲學者の階級性』もその一例となすことが出来ませう。何れにしても、あなたのあの一文は、或る

有力な印象を人々に與へたものです。それは勿論、思想内容のせいでもあつたでせうが、しかしそれにはまた、あの文章上の技巧が——その表現形式が——與かつて力があつたと思はれます。第二に、あなたの所感なるものは、大學の新聞に掲げられました。今回の學生事件に關する感想や批評やは、いろ／＼な新聞雜誌に掲げられて居り、その中には私共の立場から抗爭しなければならぬものもあつたであらうと思ひますが、記事解禁になつた當時は、私は愛兒の死によつて世事を顧みるの餘裕を有つてゐなかつたものですから、一々は眼も通さず、まして一それに取り合ふといふ氣にもなれませなんだ。ところが、あなたの所感は、それが大學の新聞に掲げられたといふ故を以て、それに反對の考を有つてゐる私としては、大學の一員として、これに對する批判を公然陳述すべき義務を有たされたかに感ずるのです。私の考へるところでは、あなたの言説の中には私共の學問に對する非難が含まれてゐる。露骨にいへば、あなたは常識的な無批判的な非難を、私共の學問の上に、多量に浴びせかけて居られる。最も批判的な立場に立つて居られるであらうと一般から豫期されてゐる哲學者からの斯かる批評に答へることとは、私共の學問的責務でなければなりません。それで、實は、この私の文章も、同じ大學新聞に載せたく思つたのですが、自由に紙面を費したいために、自分自身の編纂物を利用することになりました。あなたと同じやうな見解を有つてゐる人は世間にも多いこととせうから、問題



を公けの討論に移しても差支なからうと思ひます。過日お會ひした折、あなたの所感に對しては、いつか反對の意見を述べるといふことをお断りしておきました。今それを斯かる形で果さうとしてゐるのです。私はこれから無遠慮なことを申しますから、自然禮を失することもありませんが、あなたが之を咎められざるは勿論、讀者もまた之を諒とされんことを希望しておきます。

私は先づあなたの『所感』の全文を茲に掲げておきませう。

『死んだ安成真雄君に或文學的な會の席上で聞いた話であるが、その頃社會主義者の内にロシアの暴動學の本を読んで東京で暴動を起す場合の戰略を研究してゐる者があるとの事であつた。詳しくは覚えて居らぬが、大分細かく考へた戰略だつたやうに思ふ。その後大地震の時、どこから出たともなくあの大火事は社會主義者と朝鮮人の所爲だといふ噂が立つた。さてあの戰略は單なる空想ではなかつたのか、と一時は思はせられたほど、その噂は有力であつた。大衆がそれを信じ、資本家がそれを信じ、學者がそれを信じてゐた。それを信じないのは比較的少數の具眼者のみであつた。しかし早い人は一日經つてから、遅い人は半年一年の後にそれが嘘であつたことを悟つた。暴動の戰略の如きは鬱憤を遣る空想であつて具體

的、組織的な計畫ではなかつたのであらう。

今度暴露した事件が青年らしい空想に過ぎぬか、或は具體的な實行の着手であつたかは、自分には判断がつかない。恐らく双方の混合ではなかつたと思ふ。それについて自分は社會科學の『研究』があくまでも鬱憤をやる空想の類と離さなければならぬことを感ずる。階級意識の昂進は破壊的手段に對する無反省な共鳴を呼び起してはならないであらうか。法律さへも、反對階級の作つたものであるが故に認めぬ、といふ態度は明かに暴力的である。もしこの考へが立てられるならば、無産階級の作る法律もたゞこの階級にのみ通用するに過ぎぬ。現在の法律に缺陷があるといふこと、及び法律の運用に缺陷があるといふことと、法律そのものの權威とは區別されなくてはならない。我々は國法に對する尊敬の故に、不正な刑罰を平然として受けたソクラテスの態度を崇高として感ずる。マルクスが暴力革命主義を取つたといふことはそれ自身批評せらるべき問題であつて、何ら暴力肯定の根據を提供するものではない。法の支配を排して徳の支配を立てるといふ理想は我々も心から同感するが、かゝる徳の支配を樹立するために暴力の支配を用ゐるやうとするのは明かな自家撞着である。

マルキシズムや、レーニズムの『研究』は確に必要である。併しロシアに於ける暴力革命の模範をその儘に模倣しやうとすることは果して自由なる研究であらうか。ロシアの革命が



地主をさへ認めるほどに逆轉せざるを得なかつたのは、たとひ手段としての退却であると辯明せられるにもしろ、明かに初めの破壊手段の報いである。破壊手段なくしてはあの過激な革命は成就しなかつた、と共にその破壊手段の故に革命は逆轉する。『たと壊せばよい、今よりもよくなる』とは社會主義者の放言するところであるが、しかし人道的立場より見て革命後現在に至る迄のロシアが、革命前のロシアよりも好かつたとは何によつて立證せられるであらうか。革命によつて拂つた巨大な犠牲、大仕掛けな人間殺戮が、果して現在のロシアを産み出すにふさはしい値であつたらうか。あれだけの悲惨事を起さず合法的手段を以て現在のロシアの程度に社會を改造し行くことを望むのが、何故に生温いのであらうか。ロシアの革命家は、テロリズムを使ふことを餘儀なくさせたものは周圍の資本家國であると辯解する。しかし外國の妨害といふことがどの革命にもつきまとふのでないと誰が斷言し得るか。かゝる情勢を透見し得ず、ロシアの革命が忽ち世界革命となると考へたのは、一二ヶ月で巴里に入城すると考へたカイゼルと同一轍ではないか。ロシアの革命はむしろ人間が如何に過失を犯し易いものであるかの巨大な例證である。さうしてそれは破壊手段それ自身の含む矛盾の例證に外ならぬ。

現在の社會が改造を要するものであることは何人も疑はぬであらう。普通選舉法もまた一

つの改造の手段である。たゞ問題は此種の手段によつて徐々に進むべきか、或は暴力革命主義によらなくてはならぬかに存する。今や我々は暴力革命主義によつても目的は急速に達せられないこと、逆轉し迂回しつゝ目的の實現を次のジェネレーションに期待せねばならぬことを知つた。生活を脅かされてゐる無産階級も、過激なる手段によつて立ちどころに生活の保證を得るのではなく、更に饑饉に襲はれ、一層甚だしい生活の脅威を受けつゝ、次のジェネレーションの生活の保證するために働かねばならぬのであることを知つた。徐々たる改造の手段によつて、次のジェネレーションのために經濟上公正な社會を造らうとする着實な道は、古い諺の通り、決して目的地に達することを遅らせるものではなからう。

社會主義はあくまでも手段としてのみ意味あるものである。經濟上の公正の行はれる社會を實現するといふ目的に對して情熱的であればあるほど、その手段は目的に照して吟味されなくてはならぬ。ロシアの『研究』はこの手段の吟味に對して絶好の資料を供給するものである。しかしこの研究はあくまでも批評的に、正しき賢明なる手段を見出すためのものたるべきであつて、既に固定せる手段の考究であつてはならない。ロシアに於いて行はれた暴力革命主義的手段をそのまま摸倣するために研究するのは『研究』の名に値しない。あの高價なる實驗を『既に行はれた實驗』として批評的に考察し得ず、同じき實驗を自ら繰返して見



やうとする如きは、『科學的な態度』とも云へない。

『社會科學』の『研究』を標榜して實はレーニズムの信仰の下に階級争闘の戰略を講ずるのであるならば、科學或は研究といふ語は妄用である。』

これからあなたの文章を少し分拆することを許して下さい。

あなたはその『所感』の冒頭に先づ次のやうなことを述べて居られる。『社會主義者の内にはロシアの暴動學の本を讀んで、東京で暴動を起す場合の戰略を研究してゐる者があるとの事であつた。』——これだけのことを、『死んだ安成貞雄君に聞いた話』として、一番最初に紹介して居られる。

次に、東京の大地震の時、『あの大火事は、社會主義者と朝鮮人の所爲だといふ噂が立つた』ので、さては、安成君に聞いた暴動の戰略云々といふのは、『單なる空想ではなかつたのか』と一時は思つたが、やはりそれは嘘であつた、といふ事實を挙げ、『暴動の戰略の如きは、鬱憤をやる空想であつて、具體的組織的な計畫ではなかつたのであらう』と結んで居られる。

新聞紙上五段に亘る文章のうち、以上がほほ一段を占めてゐるが、このロシアの暴動學や、東京の大地震の際の大火事や、——それがあなたの文章の序幕の内容となつてゐるので、——先づ讀者をして、今度の學生事件の内容を、何んだか極めて物騒なもの、暴動や大火事やと一

脈の聯絡あるものゝ如く豫斷せしむる點において、十分な文學的效果を擧げてゐます。

しかし、あなたが以上の二つの事實を擧げられたのは、單なる文學上の技巧からではない。といふわけは、あなたは、すぐにそれを承けた文章で、『今度暴露した事件が、青年らしい空想に過ぎぬか、或は具體的な實行の着手であつたかは、自分には判斷がつかない、恐らく双方の混合ではなかつたかと思ふ』と言つて居られるので分かる。しかし此所の接續の具合は、私から見れば、極めて微妙に出來てゐる。何故といふに、『自分には判斷がつかない』と一應は打ち切り、しかしすぐそれに續いて『恐らく双方の混合ではなかつたかと思ふ』と稍々曖昧にこれを翻し、さうしてそれ以下の所感は、すべて、『双方の混合であると思ふ』といふことを、明言せずして而かも之を前提とせるものゝ如くなつてゐるからである。この邊の呼吸は、即くが如く離るゝが如く、承くるが如く承けざるが如くにして、しかも讀者に或る有力な印象を刻印づける點において、——あなたは意識されてゐられないとしても、——私から見ると非常な微妙さを有つてゐると思はれます。

あなたは、『今度暴露した事件』を以て『双方の混合ではなかつたかと思ふ』と言つて居られる。茲に『双方の混合』とは何を指すか？ その一は、『社會主義者の内にロシアの暴動學の本を讀んで東京で暴動を起す場合の戰略を研究してゐる者がある』云々を指す。それがあなたの



言はるゝ『青年らしい空想』である。そこで之を今度の事件に翻譯すると、『社會科學研究會員の内にはロシアの暴動學の本を讀んで京都で暴動を起す場合の戰略を研究してゐた者がある』といふことになる。その二は、社會主義者が東京の大地震につけ込んで、あの大火事を起したといふことである。東京の場合には、それは單なる噂であつた。あなた自身の言葉を引用すれば、東京の社會主義者が研究してゐたといふ『暴動の戰略の如きは、鬱憤をやる空想であつて、具體的組織的の計畫ではなかつた』が、しかし『今度暴露した事件』は、『青年らしい空想に過ぎぬか、或は具體的な實行の着手であつたか』、『恐らく双方の混合ではなかつたかと思ふ』と、あなたは言つて居られるのだから、つまりあなたは、今度檢舉された學生等を、ただに暴動學を研究したのみでなく、暴動の『具體的な實行の着手』をもしてゐたものだらうと、推測されてゐるのである。尤も前にも述べたやうに、こうビシ／＼當てはめては、何か無理な解釋をするやうな氣持がどうしても後に残るのであり、そこに何んとも言へぬ齒がゆさがあつて、それが即ちあなたの文章の妙味であらうと思ふのですが、しかしあなたは、ともかく此の推測を前提としてその所感を述べて居られるには相違ないのだから、私は先づこの前提となつてゐる推測から吟味して掛らねばなりません。

第一に、ロシアの暴動學の本とは何人の著した何といふ標題の本であるか？ あなたはそれを『死んだ安成貞雄君から或る文學的の會合で聞いた』と書き誌して居られる。ところで、安成君は既に死んで居られるのだし、ましてそれは或る文學的の會合での談片だといふのだから、今更同君を責めるわけには行かないが、しかし、あなたが新たに之を引用して批判の出發點とされた以上、あなた自身にも私の此の間に——ロシアの暴動學の本とは何人の著した何といふ標題の本であるかとの間に——具體的の答を與へられる義務があらうと思ひます。それは追て教を受けるとして、只今のところ差當り、私は寡聞にしてロシアに——否な全世界に——暴動學なる學問の成立してゐることを、承知してゐません。或はレーニンその他の人々の著作を指されてゐるのかも知れないが、もしさうであれば、これらを捉へて直ちに且つ概括的に暴動學の本とされることは如何でありませう？ 私の感じがもし間違つてゐなければ、『暴動學の本』といふ言葉のなかには、亂暴なもの、物騒なもの、仕方のないもの、讀むべからざるものとして、これを唾棄し排斥するやうな氣持が含まれてゐると思ひますが、理由を擧げずして頭から斯様な名稱をレーニズムに關する諸著作の上に加へられることは、レーニズムに對して多大の學問的價値を認めてゐる人々の、恐らく承服し難しとするところであらうと、私は思ひます。

私が今歲（一九二六年）の一月十五日に家宅搜索を受けた際に押收された書物は、一々大學新



聞の九月二十一日號に記載されてるますが、そのうちにはレーニンの『帝國主義』のドイツ語本がありました。このレーニンの著作は、ロシアの帝政時代においてさへ公然發賣されてるもので、日本では大正十三年頃に青野季吉氏が翻譯され、今日もなほ公然發賣されてるものです。そのドイツ語本が何故押収に値したか、私はその理由を知るに苦むが、しかし司法官憲は、レーニンの著作だから或は物騒なものかも知れぬといふ豫斷を、一應は下されたのかとも思ひます。私はこれに對して、別に不平を有ちません。學問の研究に専門的に従事してゐない人々が、見當違ひなことをするのは、恕し得べきことであり、或は當然のことかも知れません。しかし、あなたが之を以て暴動學の本だとされるならば、私はこれに向つて抗議を申出でずにはゐられません。

なほ私の譯したものは、私自身の編纂してゐる『マルキシズム叢書』の第一篇となしたデボリンの『レーニンの辯證法』があり、それにはレーニン自身の筆になつた辯證法に關する斷片が附録になつてゐます。これは極めて短篇ではあるけれども、しかし辯證法に關する最も有力な文献の一つであることは、恐らくあなたにも異議ありません。デボリンがその前置の冒頭に、『吾々はその爪を見て獅子たることを知る、人もし次に掲ぐるレーニンの辯證法に關する斷片を注意深く熟讀するならば、インタアナショナルの無産者がレーニンの死によつてその

最大思想家の一人を失ひたることを、意識するに餘りあるであらう』と言つてゐるのは、過言でないと思ひます。更にまた、近々のうちには、同じく『マルキシズム叢書』の第六篇として、やはりデボリンの書いた『カントにおける辯證法』の翻譯（宮川實君執筆）を出します。カントといへばあなたの方の學問の本尊の一人でせうから、その内容の價値判斷はあなた方に任せすべきであるかも知れぬが、しかし之が暴動學の本でないことは、申すまでもありません。ところで、いま社會科學に興味を有つてゐる學生がその學問の魂としてゐるのは、實にこの辯證法——唯物的辯證法——に外ならぬのです。もちろん辯證法は、マルクスのいふ如く、『現存事態の肯定的理解のうち、同時にまた、その否定の、その必然的没落の理解を、含めて居り、あらゆる生成され來つた形態を、運動の流れにおいて、従つてまた其の經過的の方面から、把握せんとするものであり、何物にも妨げられず、その本質上批判的であり革命的である』のだから、それは『ブルジョアジーやその學問的代言人にとつて、一の苦惱であり一の恐怖である』には相違なく、さうしてまた、『レーニンのすべての著作は、かゝる辯證法で飽和されて居り、彼にあつては、マルクスにおけると同じやうに、辯證法が分析すべき現象の具體的内容と融合してゐる』のだから、これまた『ブルジョアジーやその學問的代言人にとつて、一の苦惱であり一の恐怖である』に相違ない。だが、それゆへに其れを暴動學の本と名づけると



いふのでは、恐らく批評されたる人々の納得し得ざるところでありませう。我國においても、レーニンの著作集は、すでに第六卷までが公にされてゐます。これらがもし總べて暴動學の本であるならば、檢閲の厳しい我國において、さう公然と續刊される筈はありません。『暴動學』の『暴』には、すでに無批判的な價值判斷が獨斷的に包含されてゐます。それは或る文學的な會合で雜談された場合の用語としては兎に角、批判的であるべき哲學科の教授が、公の機關において、他人の學問に加へられる名稱としては、餘りに獨斷的であるかに考へられます。あなたは尙ほ後の方で、『ただ壊せばよい、今よりもよくなる』とは、社會主義者の放言するところである云々』と述べてゐられるが、これはむしろ、あなた自身の放言でなければなりません。今日世界各國における社會主義の文献は恐らく數萬冊に上ほつてゐるだらうと思ひますが、マルキシズムに關するものだけでも、『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』を見ると、世界大戰以後のものだけが、(ロシアを除いて)、八百何十冊といふ數になつてゐます。私は勿論これらの文献を盡く見たわけではなく、私共の見てゐるところは、むしろ文字通りに九牛の一毛に過ぎないので、しかし私共は未だ會て『ただ壊せばよい、今よりもよくなる』と放言してゐるやうな社會主義者に出逢つたことはありません。だが、あなたの眼には、社會主義者なるものが、さういふ風に映るのでせうか？ もしさうであるのなら、マルキシズムやレーニズムの本が暴

動學の本と映るのも致方ありませんが、しかし『謂ゆる輿論なるものゝ成心』でさへ、社會主義を、も少しはよく見てゐるのではありますまいか？ マルクスは嘗てその著資本論の序において次の如く述べました。——『科學的批判のあらゆる判斷は、余の歡迎するところである。だが、余の會て讓歩したことのない、謂ゆる輿論なるものゝ Vorurteil に對しては、偉大なるフロレンス人(ダンテ)の格言「汝の道を進め、さうして他人をその言ふところに任せよ！」が、依然として余に當てはまる。』あなたが何んと批判されやうと、マルキシストは彼等自身の道を進むに相違ありませんが、しかし彼等を以て『ただ壊せばよい、今よりもよくなる』と放言してゐるとされるのは、『謂ゆる輿論なるものゝ成心』以上の成心であると考へられます。小林輝次君がこれを批評して、日本國廣しといへども、社會主義を以て此の如きものとなすは、恐らく教授一人であらう、と言はれたのは、必ずしも過言ではありません。要するに、今度問題とされた學生等を以て、『ただ壊せばよい、今よりもよくなる』との信條のもとに、『暴動の戰略を研究してゐた』といふ風に考へられるならば、それは恐らく事實の認定を誤つてゐるものだらうと、私は考へるのです。

あなたが第二に推測されたことは、彼等が暴動の『具體的な實行の着手』をしてゐたらしい、といふことです。これは重大な推測だから、なるべく事實を明かにしておく必要があると考へ



ます。あなたは、私が前に指摘したやうに、その所感文の冒頭で、先づ東京の大地震や大火事やを回想して居られますが、私の見るところでは、この際かゝる物騒な事件を聯想することは、恐らく無用でありませう。何故なれば、新聞紙の報道するかぎりにおいては、問題とされた學生等は、曾て如何なる種類の暴動についても、その具體的な實行に着手したらしい事實がないからであります。吾々はまだ十分に事實を詮索する自由を有りませんから、決定的の斷案を下すわけに行きませんが、ただ少くとも、あなたの前提された推測には重大な疑問符を附し得るとは、言ひ得らるゝでせう。

尤もあなたが具體的な實行に着手云々と言はれてゐるのは、或る倫理學上の見地から動機を主とされた特種の立言であるかも知れません。即ちあなたは、あなたの言はれる暴動學の本に書いてある思想の普及そのものを以て、やがて暴動の具體的な實行の一端である、とされるのかも知れません。だが、もしさうであるならば、私はそのやうな物の言ひ方に反對せざるを得ませぬ。例へば、或る種の病氣を根本的に治療するためには、外科手術を施すの外ないといふ學理を、普及し宣傳すること、實際の病人に外科手術を施すため、患者を手術臺に載せたり、手術用のナイフを持ち出したりすることとは、全く別種の事柄だとしなければなりません。ところであなたは、その所感文の主なる部分を擧げて、暴力革命の非難や、ロシア革命の非難や

に費されてゐます。これらの批評は、もし問題とされた學生が、實際に暴力革命をなすための或る具體的計畫をなしたのであり、事實ロシア革命に似た或る行動に出たのであれば、勿論それら學生の行爲に對する批判となり得るでありませうが、しからざる限り、それは單にマルキシズム、レーニズム、乃至ロシア革命に對する感想——その感想の當否は更に別問題だが——となるに過ぎませぬ。私はそこに問題の混同がありはしないかと疑ふものです。

以上私は、あなたの所感の前提となつてゐる推測が、間違つてゐるはしないかとの疑惑を述べましたが、もし果してそれが間違つてゐたとしたら、すでに述べたやうに、あなたの感想は、實は今回の學生事件に對する感想とはならずして、それは、單にマルキシズム、レーニズムに對する感想をば、今回の事件を機縁に述べられた、といふ位のものになつてしまふのです。それならそれで、ただマルキシズム、レーニズムに對する批評として見たら何うであるか？ 私は次にその點についての所見を述べませう。

あなたは頻りに暴力を非難して居られますけれども、元來この『暴力』なる言葉は、すでに價值判斷を加へた言葉であり、暴力はいかぬといふのは、恰も悪人は悪いといふのと同じです。それでは證明さるべき結果が、始めから前提に入れてあることになります。だから言葉として



は、暴力の代りに *Gewalt* <sup>権力</sup> が置き換へらるべきでありませう。ところで、その *Gewalt* ならば、今日の國家は正にそれによつて成立してゐるのであり、さうして其の國家的支配——階級的支配——は、階級闘争が社會の表面に脅迫的の姿を以て現はるゝに至る以前は、何人も之を以てただ當然のこととしてゐるのです。して見れば、總じて力の行使がいけないといふのではなく、それはその折々の條件と目的によつて決せらるゝわけです。即ち吾々にとつて問題となるのは、一定の力を或る特種の目的のために、或る特定の條件のもとに、行使することの可否如何です。この場合、最も重要なことは、その具體的條件を明かにすることです。例へば、人を傷け血を流すのが善いか悪いかといふことは、一般的抽象的には問題となりませう。もちろん多くの場合にはそれが悪いことであるために、常識はこれを一般化して、一概に人を傷けるのは善くないと判断し易いのですが、しかし、個々の具體的な家を離れて、ただ家一般といふものがないと同じやうに、ただ人を傷けるといふことは在り得ないでせう。それは必ず特種な具體的な條件のもとに行はれるのであり、且つその條件の如何によつて、始めてその當否が決定されるのです。現に外科醫は、人を切り血を流し、且つ然るかぎりにおいては、病人に甚しい苦痛を與へてゐます。素人では見てゐられないやうな、外見的には頗る残酷なことをしてゐます。だが、あなたは、それを暴力の行使だと言つて非難されはしないでせう。尤も外科

醫が人を切る場合でさへ、もしそれが單に手術料を儲けるために、手術の必要なものに之を施したと云ふのであれば、——資本主義的な今日の社會では、さういふことも往々にして行はれてゐるさうですが、——それは宜しくないと云ふことになりませう。斯様なわけで、人を切るのが善いか悪いかといふことは、一概に決めて掛かることが出来ません。國家の官吏たる死刑執行官は、しばしば同胞を殺さへするのですし、軍人もまた戦争の際には夥しく人間を殺します。して見れば、社會改造問題についても、その解決のため或る特定の條件のもとでは、*necessary evil* として、已むを得ず *Gewalt* を用ふるの外ない場合があると主張する學説があるにしても、その *Gewalt* をすぐに暴力に置き換へ、暴力の行使は絶対に排斥しなければならぬと言つて之を攻撃するのは、たとひ一般の常識には歓迎されるとしても、それは決して批判的、科學的の判断とは言ひ得られないでせう。

初期の社會主義者ロバート・オウエンは、社會の改造を『力によらず道理によつて』(*not by force, but by reason*) 實現せんとしたのであり、社會の改造は、彼れの言葉によると、『一般的合意により、漸次に且つ温健に』、『如何なる仲間も、また如何なる個人も、必然に起るべき變化によつて害せらるゝことなしに』、『實現さるべきものでありました。』『ただ壊せばよい、今よりもよくなると、社會主義者は放言してゐる』と、あなたは言はれましたが、初期の社會主



義者は斯様に『温健』であり『道德的』でありました。社會主義がもし斯様なものであるならば、あなたも恐らく之を一概に非難されはしないだらうと思ひますが、實は、これが常識の先づ考へつく空想的な社會主義の型であり、従つて今日でも素人は先づそれ位のことを思ひ浮べるのであります。だが、問題は、さやうなことが可能か否かに在ります。早い話が、一定の病氣を治療するに當つて、その病人の肉體を構成してゐる有らゆる部分の細胞に、何の損害をも與へず、何の反抗をも起させずに、その目的を達することは、全く不可能であります。例へば藥を服用さすにしても、もしそれが苦がければ、味覺を司つてゐる器官は、それを受け入れることに反抗するでありませう。少くとも胃を害したり、頭痛を起したりする場合はしばしばあります。まして大手術など施す場合には、如何なる器官も、如何なる細胞も、これによつて害せらるゝことなしにと云ふわけには参りません。それを避けてゐたならば、加持祈禱でもしてゐるより外に途はありますまいが、それでは、病氣を治療するといふことは一つの空想に終り、萬一それが根本的のものであつたならば、病人自體が終に死んで仕まふでありませう。

オウエンの唱道したやうな、『力によらず、道理によつて』といふ、何人にも受けの宜しかるべき、かゝる型の社會主義が、科學的社會主義と稱せらるゝマルキシズムによつて克服されたのは、何故でありますか？ 一部の人々から見れば、それは確に社會主義の悪化でせうが、か

かる『悪化』——すなはち進化——は、なぜ生じたのですか？ それを今私は茲で委しく述べやうと思ひませぬが、しかし、そこに何等か必然的な理由がなければならぬといふことは、多くの人々の豫期し得るところでありませう。私は外科醫學の發達がそれに似てゐると考へます。外科の手術なるものは、前にも述べたやうに、生きた人間をナイフで切り、従つて生きた人間の血を流す仕事であり、それは當然病人に非常な苦痛と損害を與へます。現に手術のため死を早める場合のしばしばあることも、吾々の見聞してゐるところです。だが、それにも拘らず、近代の科學に、一定の病狀の根本的治療に對しそれが *necessary evil* としての避くべからざる手段であることを教へてゐます。生きた人間を切り、生きた人間の血を流すといふことそれ自身は、明かに人に害を加へることであり、殊に病苦に悩んでゐる患者に對し更に人爲的に斯かる苦痛を與へることは、常識からすれば、病氣を治すことと正に逆な手段のやうに見えるけれども、實際にはそれが効果ある唯一の手段である場合がある。かゝる場合には、手術はその本質と逆な現象形態を取る。本質は病氣を治すといふ懇切な行爲であるけれども、現象形態としては人を切り血を流すといふ殘虐な外見を取る。こゝにおいてか常識と科學とは衝突せざるを得ません。私は近世の醫學史に全く不案内ですが、恐らくは外科手術の最初の唱道者は、一般の常識から少からぬ疑惑と不安、非難と攻撃とを受けたものでありませう。



科學はいつも常識にぶつかる。何故なれば、もし常識が事物の真相を誤りなく捉へてゐるならば、そこに何等科學的研究の必要はないのであるが、ただ常識はしばしば事物の真相を逆さに反映してゐるがゆへに、科學はその常識の誤謬を打破する目的のために起るのであり、従つて常識と正面衝突をなすことは、科學の宿命たらざるを得ないからです。(科學的智識は普及されて常識となりますが、それは常識となることにおいて其れ自身を揚棄するのです。新たな科學的發見は、最初のうち何時も常識と對立し、久しきに亘る常識との鬭争の過程により、始めて常識と科學との合一のうち其れ自身を揚棄するに至るものでありませう。最初から常識を裏書するために出發してゐる學説は、凡俗への阿諛者です。人智の開發に何等の貢獻をも爲し得ないところの、否な常識に諛ふことにおいて誤れる常識の永續を企圖しつゝあるところの、これらの俗派學が、科學でないことは、申すまでもありますまい。) それゆへ私は、素人の常識的な考がそのまゝ無批判的に學問の世界に導き入れられることに、敢て抗争せざるを得ませぬ。科學は常識によつて批判されるべきでなく、常識が科學によつて批判されるべきものです。社會科學の研究を俗人が取締るなどといふことは、本末の顛倒です。私は自然科學の領域から一二の例を引用いたしませう。例へば、地球は自轉しながら太陽の周りを廻つてゐます。しかし、それが俗人の眼には、太陽が地球の周りを廻つてゐるかに見えるのです。それが常識であ

り、そうして其の常識を打破することが科學の任務であるがゆへに、地動説の最初の唱道者は常識から酷い迫害を受けました。しかしその迫害との鬭争のうちに、今日では地動説が常識化して仕まりました。近頃或る醫學者に聴くところによれば、酒を飲むと、實際には吾々の體溫が下がるのださうです。それは檢溫器をかけて見ても分かることだし、また兎などを實驗の材料にして、或るものには十分にアルコールを注射し、或るものには其の半分を注射し、第三のものには少しも注射せずに置いて、それらのものを箱の中に入れ、一定の装置のもとに其の箱の中の氣溫を低下せしめてゆくと、最初のもものが先づ凍死し、次いで第二のもものが凍死し、第三のもものが最後まで持ちこたへる、といふやうな結果が生ずることによつても、明確に證明され得るさうです。だが、誰も酒を飲んだら體溫が下がると考へてゐる者はありません。當人自身は、——アルコールが寒さを感じ得る神經を麻痺せしむることの結果、——酒を飲んだので温かになつたと意識するのであり、従つて寒中でも羽織を脱いだりするものだから、そばの人から見ても、彼は温かさうに見えます。この場合にもまた、事物の真相はそれと逆な現象形態を取ります。だから、酒飲みに向つて、君の體溫は次第に下がつてゐるのだから、羽織なぞ脱いでならぬと忠告すると、場合によつては拳骨を喰はされることになります。

話が少しそれましたが、私は再び外科手術の問題に戻りませう。すでに度々述べたやうに、



外科手術は生きた人間を切るのです。だから、近世の醫學に對して何等の智識をも有つてゐない未開人を、いきなり大きな病院の手術室につれ込んで、澤山の病人が胸や腹をたち割られながら呻きもがいてゐる所を見せたならば、恐らくびつくりするだらうと思ひますが、丁度それと同じやうに、現實の社會を生けるがまゝに解剖せんとする社會科學の研究にも、またその研究の結果に基づく政策上の手段にも、もし之を科學的未開人に見せたならば、さし當りびつくりするやうなことが在り得るであらうと考へます。だが、外科の醫學者は、『ただ病人を切ればよい、病氣は今よりもよくなる』と放言してゐるのではありますまい。それと同じで、社會主義者も、あなたが言はれるやうに、『ただ壊せばよい、今よりもよくなる』と放言してゐるばかりではありません。私は醫學に對しては全くの門外漢ですが、ひそかに思ふに、今日の如く外科醫學が發達して來たのは、藥を服ますとか、膏藥をはるとか云ふやうな手段では、或る種類の病氣は決して根治せぬものであり、しかもその病氣を根治しなければ、患者は日々衰弱して行つて、たうとう死んで仕まふに決まつてゐる場合があるからであります。それと似たことが社會の病氣にもありはしないかと私は考へます。

あなたはロシアの革命によつて澤山の人のいのが犠牲とされたことを指摘して居られます。私はそれほど無かつたのでは無いかと思ひますが、しかし、たとひさうであつたにしろ、吾々は同時に他方において、今度の世界戦争においても亦た、實に遙に多くの人々のいのが犠牲にされたことに、眼を覆うてはなりません。ところで何故かやうな戦争が起るか？

いふまでもなく、マルキシストは、その根本原因を資本主義的な社會組織に見出してゐるのですが、——さうしてその解釋は勿論あなたの賛成されぬところだらうと察しますが、——何れにしても、現在の社會組織を維持してゆくためにも亦た實に夥しき人間のいのが犠牲にされねばならぬと云ふことは、現に眼の前に起つてゐる事實ですから、あなたも認められなければならぬでせう。世界大戦争の慘禍、それはあなたの眼に神の榮光を以て映じ、ロシア革命の犠牲、それはあなたの眼に殘虐なる獸性として現はれる。左様なことはありますまい。だが戦争のことはよしませう。吾々はたゞ吾々の住んでゐる社會の平常の状態を眺めて見ませう。吾々は、そこに、——今日の經濟組織のもとに、その組織の束縛のために、——日々無数の人々が天壽を全うせずして死にゆくことを認めねばなりません。近代の醫學が如何に進歩しても、その恩恵が、國民の最大多数を占めてゐる無産者に及ぶところの極めて僅かであるといふことは、トルストイの愁訴を聴くまでもなく、吾々自身が眼で見、耳で聞き得る事實であり、醫學者ならびに醫師のすべてが否認しないところであると、私は考へますが、單にこの點のみから見ても、今日の社會は、人間の力で助け得られる人のいのが——なかなづく無産階級に生れ落ち



る極めて多くの小兒のいのちが——犠牲とされることによつて維持されてゐるのです。それによつて維持されてゐるのではないと言はれるかも知れませんが、それはブルジョア階級による獨占の必然的な反面で、かゝる獨占は多數者の犠牲によつて始めて維持されてゆくのです。かくて吾々は、如何にも平和に見ゆる（それは現象形態です）現在の經濟組織のもとにおいて、日々無數の嬰兒の死體、小兒の死體、勞働に疲れ果てたる人々の遺骸が、實に日ごとに積み重ねられつゝあることを知るのです（これが事態の真相です）。もしあなたの言葉を借ることを許されるならば、そこには『巨大な犠牲』が常に拂はれてゐるのであり、『大仕掛けな人間殺戮』が組織の壓力により絶えずちり／＼と行はれてゐるのです。かくて此の場合にも、事物の真相はそれと逆な現象形態によつて蔽はれてゐます。それゆゑ眞の科學としての社會科學は、生ける現實の社會に向つて鋭利なるメスを振り、その真相を隠蔽せる諸々の現象的外皮をひきむき、その内的聯絡のうちに伏在するところの、病根の本源を暴露しなければなりません。そこに病理學の使命があり、且つその病理學の基本理論に基づいて、一定の臨床醫學が生まれるわけにあります。

なほあなたは、暴力を非難すると同時に、法律の權威を尊重すべきこと、社會の改造は合法

的手段を以て行はるゝの望ましきことを説いて居られます。これは、最近、安部磯雄、吉野作造、堀江歸一の三氏が勞農黨以外に新たな無産政黨を生むための産婆役として立たれた折に發表された、新政黨創立の眼目と同じものです。さて斯様な要求が多くの人々の得心を買ふに足ることは言ふまでもありません。しかし私どもは、この表面の要求に覆はれてゐる眞實の内容を、一應吟味して見なければなりません。

問題は社會組織の改造です。歴史に例を求めらるなら、例へば徳川幕府を倒すといふこと、日本を封建的な社會組織から資本主義的なそれへ推移せしむるといふこと、一言にしていへば明治維新の革命、それが問題であり、さうしてあなたは、かゝる革命が合法的手段を以て行はるることを望ましとされるのです。しかし、徳川幕府を倒すといふこと其れ自身が果して徳川幕府の制定する法律のもとに實現され得るでせうか？ また得たでせうか？ 幕府を倒す法律を幕府自體が制定するといふことが、たとひ望ましきにしても、果して可能でありませうか？ いふまでもなく、それは不可能であつたればこそ、例へば私の郷里の先輩吉田松蔭は、そここそ革命の具體的な實行の着手のために、當時の國禁に觸れ、斬罪に處せられてしまひました。彼は實に當時における法律の權威を認めず、むしろ當時の權威者を轉覆せんとしたところの、危険人物に外ならぬのです。もしあなたが幕末當時に生まれて居られたならば、あなたは彼を



非難されたであらうし、非難されなければならぬ筈です。が、それにつけて、私の聊か奇とするところは、かゝる社會秩序の紊亂者が、今は神として祭られて居り、さうして恐らくあなたも其れに對し甚しき反感は有たれてはるまいと云ふことです。山口縣の萩には松蔭神社があり、東京の世駄ヶ谷にも同様の神社があつたかと記憶します。そのみではない、吾々が奉職してゐる大學の構内自體にも尊攘堂があり、さうして其處には吉田松蔭の靈が祀られ、毎年十月二十七日彼れの忌日には祭典が行はれ、また『維新前後、難に斃れ節に殉じたる志士仁人の遺墨』なども蒐集されて居り、それは『子弟を鼓舞し士氣を作興するを以て任とした』ものだといふことです。(『尊攘堂由來記』による)。法律秩序の紊亂は人間として最上の罪惡であるかの如くに沙汰されてゐる今日、此の如きは聊か不可思議とせざるを得ませぬが、これは畢竟、經濟組織の革命は道德觀念の革命をも伴ひ、社會の變革期における價值判斷は、やがて革命の成就と共に轉倒することを、物語つてゐるに過ぎぬでせう。勝てば官軍、負ければ賊で、革命の前夜には國家が極刑に處した罪人でも、革命が成就した後では、位を贈られ神に祀られることになつてゐます。ところで、これと同じやうなことが、今後もなほ起り得ないと保證され得るでせうか？ 現代の經濟組織は階級制に基づく點において、封建社會とその本質を同じくするものであり、従つてその胎内から新たなる社會の生まれ出づる様式も、ほど同様であらねばならぬ、

といつたやうな考の出るのも、必ずしも不自然ではありません。社會が階級的社會である以上、さうして立法の實權が支配階級に握られて居り、且その支配階級が飽くまで現存社會組織の根本原則を維持せんとする以上、社會組織改造のための合法的手段が、次から次へと非合法的なものに轉化するであらうことは、見易き道理です。かくて纔に残されてある合法的手段も、それが有力になれば、新たなる法律の制定により、直ちに非合法的なものとされる虞がありませう。しかし、それでも尙ほ、社會の改造は徹頭徹尾、合法的手段によつて行はれなければならぬと主張するならば、それは畢竟、現在の組織を永遠に維持せんとする要求に外ならぬことになり、たとひその外皮においては社會改造の要求を現象形態としてゐても、その本質においては社會改造の否認に外ならぬこととなるでせう。私はあなたの法律尊重論に反對するものではありません、ただそれが何を意味するに至るべきかを明かにせんとしたに過ぎませぬ。

法律尊重論については、なほあなたの注意を促すべき方面があります。それは、昨年末京都帝國大學々生の或者が檢束された時の司法警察の處置が、違法であつたといふことです。そのことは、當時すでに京大法學部教授一同の名において發表された聲明書に詳しく述べてあることであり、今更私がそれを茲に繰返す必要はありません。ただ私が問題とするところは、法律尊



重論を高調せらるゝあなたが、現に吾々の眼前に行はれてゐる非合法的行為に對しては、見て見ざるが如き態度を採つて居られることです。あなたも恐らく承認さるゝであらう如く、當時における學生の檢束は、明かに非合法的なる *Gewalt* の使用でありました。吾々がもし非合法的なる力の使用を暴力の行使といふならば、それは將來の出來事として處れるといふよりも、現に吾々の眼前において行はれてゐる事實です。かゝる不法の檢束は、今回の學生事件の場合に始めて行はれたのではなく、それは無産階級に對して殆ど年中行はれてゐる處です。私は司法警察の實際に通じた或人から、近頃次のやうなことを聞きました。——昨年末京大の學生が不法の檢束を受けたといふので、京大の教授たちは聲明書まで出してやかましく言つたけれども、それは實際に通じない學究の空論で、そんなことに拘泥してゐては、司法警察の業績は擧がるものではない。もし犯罪の搜索をすべて法律に規定してある手續によらなければならぬとしたら、今日擧げられてゐる犯罪の大半は、擧げ得られなくなるだらう。そこで法律には何んな規定があらうと、社會的必要は法に超越すといふ原理から、ともかく怪しいと睨んだ奴は片端から引張るのだ、云々。——私はその方面の素人ですから、もちろん責任を有つて何も言ふことは出來ませぬ、私の僅かな見聞の範圍では、どうも之が事實のやうです。ところで之は何を意味するでせうか？ それは謂ゆる犯罪の搜索のため、絶えず非合法的なる *Gewalt* が、現

存秩序のもとにおいて、現に日々行使されてゐる、と云ふことに外ならぬでせう。非合法的に行使される力、それを暴力といふべくんば、その暴力のため無産者階級は現にどれほどの迷惑をしてゐるか知れないのです。しかるに、そのことが、暴力否認論者、法律尊重論者自身によつて、當り前のことであるかの如くに是認され黙認されてゐるのは、どういふ譯ですか？ 少くとも當面の場合、それがあなたにとつて問題とならぬのは、何故ですか？ 社會主義者が暴力を用ふるかも知れぬといふ掛念でさへ、すでに心配の種子となつてゐるのに、何故現に行はれてゐる暴力は、あなたにとつて問題とならぬのですか？ 學生に向つて暴力の非なることを説諭されてゐるあなたが、それら學生が暴力を蒙つたことを等閑に附して居られるのは、何故ですか？ 小林君があなたを批評して、あなたはプロレタリアートの反抗にはひどく神経を悩まされてゐるけれども、『しかもブルジョアジーの如何なる暴虐にも少しの不安も危惧も示されぬ』といひ、『ブルジョアジーの暴力團、官憲司法権による弾壓は正當である、だが、プロレタリアートの反抗は正當でない、とのお考へだ』といつて、『哲學者の階級性』を攻撃して居られるのは、社會運動の實狀に通じて居られる同君として、無理からぬことだと思ひます。

なほ、あなたの文章には、次のやうな一節がありました。『現在の法律に缺陷があるといふこと、及び法律の運用に缺陷があるといふことと、法律そのものの權威とは、區別されなくて



はならない。我々は國法に對する尊敬の故に、不正な刑罰を平然として受けたソクラテスの態度を崇高として感ずる。』これはソクラテスを引いて學生を戒められたものですが、しからばそのソクラテスとは、果して如何なることを爲したのであるか？ しばらく之を阪口博士の『概觀世界史潮』に徴するに、それには次の如く述べてあります。『……アテーネは幾多頻繁なる政變を蒙り、戦後の困難に悩み、最後に凡庸なる民主政治に立返つた。この政治の犠牲となつた最も千古に卓越した悲劇の主人公は、即ちこの當時の最大思想家ソクラテスであつたのである。當時彼が人民の裁判所で數へ上げられたるその罪狀を見よ。曰く、彼は民主政治に反對すと、これソクラテスはアテーネの衆愚が跋扈しつゝありといふ現状を忌憚なく批評したが故である。曰く、ソクラテスは國家の宗教を誹謗すと、これ彼が自由に現在の迷信の事實を指弾したが故である。曰く、彼は少年子弟を誘惑すと、これ彼が世人の執つてゐる學問の方法の誤謬を非難し、新教育を主張し、これを自家の聽講者に施したが故である』(三四頁)。これがために、當時彼は死刑の宣告を受け、毒杯を仰いで死んだのです。事實はさういふ事實なのです。さうしてその事實が、あなたにより、惡法といへども法である以上、吾々はその惡法に従はなければならぬ、と云ふことの説教のために、利用されてゐるのですが、この場合あなたの選ばれた例は餘り適切でないと思へられます。あなたが模範とせよとされるソクラテスと、今

度問題とされた學生と、その間に果してどれだけの差異がありませう？ ソクラテスは何をしただか？ 第一に彼は民主政治に反對し、これが現實を忌憚なく批評したといふのですが、問題とされた學生も、資本主義政治に反對し、これが現實を忌憚なく批評せんとしたものではないでせうか？ ソクラテスは、第二に、自由に現在の迷信の事實を指弾したといふのですが、吾々の現に住みつゝある商品生産の社會には、社會關係についての種々なる迷信がある。それをマルクスは商品世界の魔術性といふのであるが、件の學生等は、正にその迷信を打破せんとしたのではないでせうか？ ソクラテスは、第三に、世人の執つてゐる學問の方法の誤謬を非難し、新教育を主張したといふのですが、社會科學研究會の會員は、正に學問の方法として唯物辯證法を採り、彼等が眞の科學と信ずるところのものによる新教育を主張したのではないでせうか？ 私は彼等が果して如何なることを爲したか、その個々の具體的事實については全く不案内であるが、ただ彼等の思想上の立場が今述べたやうなものであらうことは、先づ間違ないからうと思へます。して見れば、彼等は、少くともソクラテスと正反對のことをしたのではありますまい。さうして彼等もまた、治安維持法に問はれたのです。私は近頃、法律學を専門とする吾々の同僚の説明によつて、彼等の行動がこの法律に觸れてゐるか否かについては、大なる疑問の存することを知りました。私は法律學上の見解としては、それに十二分の信用をおき



ます。だが實際における裁判所の判決は有罪になるものと假定して話を進めませう。さうすると、どうなりますか？ 治安維持法が悪法であることは、多くの人々の主張するところです。だが、たとひ悪法であつても法である以上、その法に基づいて有罪の宣告を受けた以上、彼等もまた恐らく平然としてその刑罰を受けるでありませう。また事實、シベリヤか支那かへでも逃げ出さなくては、その刑罰を受けるよりほか致方がないので。しからば『不正な刑罰を平然として受けたソクラテスの態度を崇高として感ずる』と言はれたあなたは、たとひこれら學生の態度を崇高として感ぜられぬにしても、さまで之を非難される理由はないと考へます。ソクラテスも當時の法律秩序を紊亂した者であり、それゆゑに當時の裁判によつて死刑に處せられたのです。しかるに彼れの態度のみ、あなたに『崇高として感ぜらるゝ』ことを、私は不思議といたします。數千年の時の距りがそれを説明するといふのであれば、それは全くあなたが現代に捉はれて居り、やがて現代の支配階級の利害に密接に結び付いて居られることの證據にかなりません。あなたを數千年の昔にかへしたならば、あなたも『アテーネの衆愚』と一緒になつて、ソクラテスを非難されることになりはしないでせうか？

(一九二六年——大正十五年——十一月發行『社會問題研究』第七十五冊所載)

## 資本蓄積の行き詰り

——生産手段と消費資料との關係につき高田博士に答ふ——

私が本誌の前冊(『社會問題研究』第六十九冊)に掲げた『労働の生産力の發展と資本蓄積との衝突』は、去る一月中旬ローザ・ルクセンブルグの記念講演會において試みんとした講演——それは都合により中止したもの——の手控を、そのまゝ公にしたものである。元とそれは與へられたる時間を豫定して起草したものだから、説いて不備な點が少くない。茲にその一を補はんとする所以である。

私は先きの論文において次の如く述べた。『要するに、吾々が労働の生産力の増加を許すかぎり、それが不變であるといふ條件のもとに始めて維持されるところの、マルクスの表式における各種生産部門の比例的關係は、全く破れて仕まふことになる。けだし、社會の總生産物は  $CV + V + M$  (生産のため消費されたる不變資本と可變資本との和に加ふるに、生産されたる剰餘價值を以てしたるもの) から成り立つてゐるが、もし労働の生産力が増加するならば、それにつれて  $V$  即ち可變資本(労働者階級の受くる勞賃)に相當する部分のみが、相對的には益々



減少することとなり、かくて社会的生産は年々より擴張されたる規模において行はるるに拘らず、従つてまた生産せらるゝ消費資料の價値量は、年々増加しゆくに拘らず、社会成員の最大多數を占むる労働者階級のこれらの消費資料に對する需要は、年々相對的の減少を示すこととなるからである。』さてこの一節のうちには、『社会的生産が年々より擴張されたる規模において行はるゝならば、生産せらるゝ消費資料の價値量もまた年々増加してゆく』といふ主張が含まれてゐるが、この主張は私が數年前ツガン・バラノウスキーの表式を批評せる折既に述べたものであり、さうして其れに對しては高田（保馬）博士が嘗て詳細なる非難を加へられたものである。今その非難を無視し、依然として同じことを主張してゐるのは、禮であるまい。よつてこの問題に對する所見の相違を明かにしておく。

\* 『社會問題研究』第六九冊（通冊二四〇六頁）

先づツガンの擴張再生産の表式を掲ぐれば、次の如くである。（pは生産手段、aは勞賃、rは利潤——之をマルクスの符號に翻譯すれば、pはc、aはv、rはmに當る）。

第一年度	$1632p + 514a + 144r = 272$	（一）生産手段・生産	（二）労働者用消費資料の生産	（三）資本家用消費資料の生産
第二年度	$1632p + 514a + 144r = 272$		$408p + 136a + 136r = 680$	$360p + 120a + 120r = 600$
第三年度	$989p + 493a + 828r = 3312,3$		$372,6p + 93,2a + 15,2r = 521$	$360p + 90a + 150r = 600$

第三年度  $2585,4p + 484,6a + 1239r = 409$   $366,9p + 68,9a + 17,5r = 611,3$   $360p + 17,5a + 172,5r = 600$

\* 『社會問題研究』第三一冊および拙著『社會組織と社會革命』（六八頁）等における符號の説明には、誤記がある。

この表式を見ると、（第一）生産手段の生産額は年々増加してゐるが、（第二）労働者用の消費資料の生産額は年々減少して居り、それと同時に、（第三）資本家用の消費資料の生産額は年々同じであり、従つて全體における消費資料の生産額（労働者用のそれとを合計したもの）は年々減少してゐる。簡単にいへば、生産手段の生産額は年々増加しながら、それらの生産手段によつて生産せらるゝ消費資料の生産額は、年々減少することになつてゐる。そこでツガンは、この表式を根據として、『消費はいよゝゝ減するも、生産はいよゝゝ擴大して、資本制生産には何の故障も起らない』といふことが立證される、と主張するのである。

ところで私は、ツガンの表式に現はされてゐるやうな事實、即ち消費資料の生産額は年々減少してゐるのに、生産手段の生産額のみが際限なく年々増加するといふやうな事實は、實際において起り得ない、と主張するに反し、高田博士は、私のその主張を非なりとせらるゝのである。博士はいふ、——

『しからばこの主張の根據如何。博士（河上）によれば、「すべて生産手段なるものは、直接



か間接か、間接のまた間接かには、必ず享樂財を生産するための手段となるものだから、その手段となるべき物のみ無暗に殖えて、その目的とするところの享樂財の生産が却て減少するといふやうなことは、決して在り得ないからである。だから數字表を事實に合はすためには、第一部門における生産手段の生産額の増加につれて、第二部門乃至第三部門における享樂財の生産額が増加するやうに、訂正しなければならぬ。」この主張は一讀まことに尤もらしく見ゆる、然れども私共は一步立ち入りて考へなければならぬ。この場合における生産額とは果して何物を意味するか。事情を單純ならしむるため、生産せらるゝ消費財はその種類性質において變化せざるものと假定しやう。……ツガンの表における消費財の價値はなるほど年々減少してゐる。然れどもこの事は必ずしも消費財の數量の減少を意味するものではない。従ひてその使用價値の減少を意味するものではない。……ツガンの數表はたゞ消費財の價値の年々減少することを示すのみ。而してかの生産額を以て生産物の價値の總量または價格の總體の意味に解すれば、享樂財の生産額が年々減少して生産手段の生産額が年々増加するが如きことは、事實において在り得べからずといふ河上博士の主張は、私思ふに何等の根據なきものである。』

かくて博士は、私の主張に何等の根據なきことを立證するために、經濟學者が好んで用ふる

想像的の原始状態に吾々を導かれる。博士はいふ、――\*

\* 『改造』(大正十三年十二月發行)に載すところの『剩餘價値第三論』八九頁

『試みに今一例を考へる。一團の漁夫を想像せよ。彼等は各一日八時間づゝ働きて四尾の魚をとる。その時、労働時間を以て價値の尺度とすれば、而して價値の本質を労働にありとすれば、一日間に生産せられたる消費財の價値は、八(労働時)である。假に百日間を通すれば八〇〇である。しかるに、彼等各一日二時間を割き、百日を費して網を作るとせよ。この網の價値は二〇〇である。彼等はこの網の成れる後、毎日二時間を費して第二の網を作る傍ら、第一の網——それは百日にして破損し盡す——を以て日々二時間づゝ働きて四十尾の魚を得るとせよ、この四十尾の價値は、毎日の労働二時間と網の消耗部分二労働時間との合計四に過ぎぬ。生産期間百日の消費財生産額は、數量において四〇〇より四〇〇〇に増したけれども、價値においては八〇〇より四〇〇に減じてゐる。生産手段の生産額は、その價値において〇より二〇〇に増加してゐる。結局前後の二生産期間を比較するに、その生産する消費財の價値において著しく減少しながら、その生産する生産財の價値において零より二〇〇に増加してゐる。』\*

\* 同上、九〇頁



何等の生産手段をも用ひざる『一團の漁夫』を『想像』することから出發して、一旦以上の事實を論證されたる博士は、忽ち眼を轉じて資本主義の社會を考察される。曰く、  
 『かゝる原始的状態から眼を轉じて考察しても、以上の關係に變化はない。例へば資本家と労働者とより成る一の社會をとる、而して二の異なる時期における生産額を比較せよ。二の時期において共に單純複生産の行はるゝ限り、労働者の數、労働時間、餘剩價値の大きさに變化なくば、生産せらるゝ消費財の價値に變化なき譯である。然るにも拘らず、生産方法に變化あり、所謂迂回的生産が後期において著しきを加へたる場合、年々の生産財の生産額の價値は前期のそれよりも遙に大であり得る。生産力の著しき増加あり、同一の生活標準（生活のために要する同一の財量の消費）を維持するために以前よりも遙に價値の小なる消費財を以て足る場合には、消費財の生産が——その價値總量において——著しく減少し、ただ生産財の生産額のみ——その價値總量において——著しく増大し得る。單純複生産の二の時期を選みて比較したるを咎められざらんことを望む、それはただ事實の理解を容易ならしむるためである。而して河上博士の主張の事實の上に根據を有せざることを明白ならしめんがためである。かくて、生産の方法に變化ある限り、その價値の點から見て、消費財の生産額は一様であり又は減少しても、生産財の生産額は増加する。而もこれはマルクスの立場から考へ

て當然すぎる事である。……』\*

\* 同上、九〇、九二頁

『生産手段の生産額の増加するにつれて消費財または享樂財の生産額の増加あることを要すとなすカウツキー (Kautsky, Krisentheorie. Die Neue Zeit. XX. Jahrg 2.)と河上博士との見方は、生産方法に變化なき限り、といふ假定の下において眞理である。然れども、資本主義生産と切り離すべからざる生産方法の變化を考へ來たれば、これ到底成立し得べからざる見解である。河上博士は曰く「この數字表を事實に合はすためには、第一部門における生産手段の生産額の増加につれて、第二部門乃至第三部門に享樂財の生産額が増加するやうに訂正しなければならぬ」と。而も生産方法に變化ある限り、この命題は成立せず。而してツガンの數字表にありては、不變資本と可變資本との割合が年々變化してゐる、これは正に生産方法の變化そのものを意味すると見なければならぬ。この變化ある限り、消費財の生産額は減少してなほ生産手段の生産額は増加し得る。……』\*

\* 同上、九一、九二頁

私は問題の所在を明かにするため、博士の所論を出來うるかぎり十分に引用したつもりであ



るが、これを通讀されたる讀者は、博士の主張もまた『一讀まことに尤もらしく見ゆる』と思はれるかも知れない。そこで私の立場からすれば、自分の主張をもつと根據づけ、同時に博士の主張を少しく吟味して見る必要がある。

第一に、博士の想像された『一團の漁夫』、これが先づ問題である。この一團の漁夫は、私をしてロッシヤーが資本の本原的起源を説明するために設けたそれを思ひ出ださしむる。ロッシヤーはいふ、『吾々をして、私有地も資本を有つてゐない漁民——即ち裸で洞穴のなかに棲み、退潮の際置き去りにされた魚を素手で捕へ、これを食物としてゐる漁民を、想像せしめよ』と。私は今の場合、この空想的漁夫團のうちに、現實を蔽ふ魔術の泉源を見出だす。何故といふに、生産の結果たる生産物が、同時にまた、生産の前提としての生産手段となるといふことは、人間の生産的労働の特徴であるに拘らず、件の漁夫團は、その出發點において、全く何等の生産手段を有しない。それは經濟學者のお伽話のうちにこそ屢々出現すれ、地球上には嘗て存在したことのない幽靈的漁夫團である。なほ生産手段は労働對象と労働手段とに分れ、且つ謂ゆる原始産業を除く場合の外は、労働對象そのものがまた労働の生産物たることを原則とするに拘らず、件の漁夫團は、博士の假定に従へば、既にその生産方法を變化した後でも、ただ労働手段たる生産手段(網)を有するのみで、最後に至るまで、マルクスの謂ゆる『原料』な

るもの——労働の生産物であつて更に労働の對象となるもの——は、少しも之を有たない。簡單にいへば、件の漁夫團からは、労働の生産物としての労働對象が徹頭徹尾抽象されてゐる。さうして、私の見るところによれば、其處に手品のたねの一つが横たはるのである。

試みに件の漁夫團をして、その捕獲し得たる魚類を生まのまゝで食はしむることなしに、これに何等かの調理を施さしむることに假定して見よ。しかる時は、彼等の捕獲し得たる魚類は、労働對象としての生産手段となり、調理されたる魚類が始めて彼等のための消費資料となるが、この場合、生産手段は益々増加しながら消費資料のみ次第に減少するといふことが、價値の觀點からしても、果して可能であらうか？

生産手段のうち労働對象たる原料は、その形態を變ずることになり生産物の實體を形成するものであるから、たとひ價値の觀點からするも、生産物の生産増加は即ち生産手段たる原料の消費増加であり、生産手段たる原料の消費増加は即ち生産物の生産増加であるといふ關係が、極めて明白に現はれる。それゆへにこそ私は先づこれを問題とする。しかるに高田博士の想像された一團の漁夫はただ『自然に存在せる労働對象』に働き掛けるのみであり、彼等の労働は魚類といへる自然の産物を『自然全體との直接の聯絡から切り離す』ことのみを目的として居り、彼等の世界にはマルクスのいふ意味の『原料』即ち『そのもの自身が既に言はば以前の



労働により濾過されたもの<sup>\*</sup>が全く存在しない。既に述べたやうに、生産の結果としての生産物はまた生産の前提としての労働対象となるといふことが今日の原則であり、人間がただ自然に存在せる労働対象に働き掛けるといふことは、原始林の木を伐るとか、地中の礦物を採掘するとか、水中の魚類を捕獲するとかいふやうな、極めて例外的の場合に限られる。しかるに拘らず、高田博士が先づ、何等の原料をも有せざる一團の漁夫を想像されたのは、——博士自身がこれを意識するゝと否とを問はず、——それが博士の立論に最も好都合なるがためである。曰しかも博士は、この空想的漁夫團から直ちに飛躍して現代の資本主義社會に乗り移られる。曰く『かゝる原始的狀態から眼を轉じて考察しても、以上の關係に變化はない、例へば資本家と労働者とか成る一の社會をとる、云々。』すばらしき飛躍といはなければならぬ。

<sup>\*</sup> 資本論第一卷(カウツキー版)、一三四頁

私は以上を以て、博士の想像された漁夫團の特徴を明かにした。それは、その出發點においては、素手で魚を捕り、生まのまゝで之を食ふところの、即ち如何なる意味においても何等の生産手段を利用せざるところの、幽靈的漁夫團である。それが後には網を利用することになる。しかし生産手段はただ此の網といふ労働具に限られる。彼等はなほ依然として『原料』に

屬すべき何等の生産手段をも利用せぬのである。それは飽くまで特異の一團と言はなければならぬ。しかし斯かる特異の一團について考察しても、生産せらるゝ生産手段の價值量のみ増加して、それらの生産手段により生産せらるゝ生産物の價值量が却て減少するといふが如きことは、決して起り得べきでない。私は進んでそのことを明かにするであらう。

博士の擧げられたる例によれば、例の漁夫團が網を利用するに至つてから、『生産期間百日の消費財生産額は、數量において四〇〇より四〇〇〇に増したけれども、價值においては八〇〇より四〇〇に減じてゐる。生産手段の生産額は、その價值において〇より二〇〇に増加してゐる。結局前後の二生産期間を比較するに、その生産する消費財の價值において著しく減少しながら、その生産する生産財の價值において零より二〇〇に増加してゐる。』しかし茲に注意しなければならぬことは、博士がこの漁夫團をして、最初は一日八時間の労働に従事せしめ、網を作りたる後は、『毎日二時間を費して第二の網を作る傍ら、第一の網を以て日々二時間づゝ』働きしむるに止めてゐられる點である。即ち漁夫の労働時間は、後の期間において前の期間に比し半減してゐる。だから捕獲せらるゝ魚類の數量は四〇〇から四〇〇〇に増加しても、その價值量は八〇〇から四〇〇に減るのである。それは當然のことである。もし労働時間を後の期間にもやはり八時間であるとすれば、一日の労働時間は、網の生産のための二時間と、



網を以ての魚類捕獲のための六時間とに分れ、一日のうちに捕獲さるゝ魚類の數量は、前期の四〇〇に對し一二、〇〇〇となるであらう。しかしその價值量は、前期にも八〇〇であり、後期にも依然として八〇〇であるであらう。此の如く魚類の數量が四百尾から一萬二千尾に（即ち三十倍に）増加しながら、その價值量が不變であるのは、魚一尾づゝの價值が減少したためであり、それは魚一尾に含まれる労働量が減少したためであり、それは畢竟一定分量の労働を以てより多くの魚が捕獲され得るに至つたこと、即ち労働の生産力の増加を意味する。この労働の生産力の増加は、網といへる生産手段の利用に本づく。ただそれだけのことである。要するに、労働時間を一定する限り、たとひ如何なる割合において或は消費資料の生産のため或は生産手段の生産のため之を充當すとすも、これによつて生産せらるゝ消費資料の價值はいつも同じである。

博士みづからも亦た言ふ、『二の時期において共に單純複生産の行はるゝ限り（？）、労働者の數、労働時間、餘剩價值の大きさ（？）に變化なくば、生産せらるゝ消費財の價值に變化なき譯である』と。その通りである。博士は例の漁夫團の人員を示されてゐないが、假にその労働者數に變化なく、またその労働時間に變化なきものとすれば、たとひ網が利用せられ生産力が著しく増加するやうになつてからでも、『生産せらるゝ消費財の價值に變化なき譯である。』『然る

にも拘らず』と博士は續けていふ、『生産方法に變化あり、……生産力の著しき増加あり、同一の生活標準を維持するために以前よりも遙に價值の小なる消費財を以て足る場合には、消費財の生産がその價值總量において著しく減少し、ただ生産財の生産額のみその價值總量において著しく増加し得る』と。かくて『變化なき譯である』ところの『生産せらるゝ消費財の價值』は、『然るにも拘らず生産力の著しき増加あり』の一句により、忽ち『著しく減少し得る』ものに轉化する。私は此の一節の聯絡を知るに苦しむ。しかも博士は尙ほ語を續けていふ、『單純複生産の二の時期（？）を選みて比較したるを咎めざらんことを望む、それはただ……河上博士の主張の事實の上に根據を有せざることを明白ならしめんがためである。』

或は博士の問題とせらるゝところは、労働者數、労働時間、従つて生産物の價值總量等はどうでも可いとして、ただ生産方法の著しく異なる或る二つの場合を想像し、さうして第二の場合においては、第一の場合に比し、生産せらるゝ生産手段の價值量はより多いけれども、生産せらるゝ消費資料の價值量はより少いことが在り得るといふことを、主張せらるゝにあるのか？ もし然らば（現に博士の例示された漁夫團の生産額は、その價值總量において前期の八〇〇から後期の六〇〇に減少してゐるが、それは縮小再生産であつて、擴張再生産ではなく、



單純再生産でもない。博士の言はるゝ通り、それは『當然すぎる事である。』しかし吾々の問題は、擴張再生産についてである。だから、例へばツガンの數表においても、第一年度の生産物の價値總量は四〇〇〇(2720+680+600)であり、第二年度のそれは四五三三三(3312.3+620+600)、第三年度のそれは五五二〇三(4309+611.3+600)であるといふやうに、年々次第に増加してゐる。假に問題を單純再生産に局限するとするも、生産せらるゝ價値量は年々同一でなければならぬ。即ち一年度内に生産せらるゝ價値量は、少くとも年々同一であるか、さもなければ年々増加してゆく、これが吾々に與へられたる問題の場合である。さうして吾々は、これらの場合に、『消費財の生産がその價値總量において減少し、ただ生産財のみその價値總量において増加し得る』といふことが、果して可能であるか無いかを、問題としてゐるのである。(現にツガンの表式には、年々生産せらるゝ價値總量は増加しながら、生産せらるゝ生産資料の價値量のみ次第に減少す、と假定されてある。) さうして私は之に對し、左様なことは到底不可能であるといふのである。

何故それは不可能であるか？ 私はそれを説明して『すべて生産手段なるものは、直接か間接か、間接のまた間接かには、必ず生産資料を生産するための手段となるものゆゑ、その手段

となるべき物のみ無暗に殖えて、その目的とするところの消費資料の生産が却て減少するといふやうなことは、決して在り得ないから』と言つたのである。<sup>\*</sup> 私は今見ても、前記の説明は間違つてゐないと考へる。博士は私を以て、使用價値の觀點から物を見て居り、價値の觀點から見ることが忘れてゐる、と想定されたかの如くであるが、この場合問題は一に歸する。何故なれば、生産手段の使用價値はすべて生産的に——即ち他の物を生産するために——消費されるのであり、さうして生産的にその使用價値を消費したものは、同時にそれ自身の價値を生産物の上に移轉するからである。この關係は、既に述べたやうに、労働對象たる原料について考へれば、最もよく分かる。例へば棉花を以て(それは種々なる生産物の原料となり得るけれども、假に)綿絲の原料としてのみ役立つものとするならば、他の事情にして同一なるかぎり、棉花の生産量の増加はやがてまた綿絲の生産量の増加でなければならぬ。それは價値の觀點から見ても同じである。棉花の使用價値が綿絲の生産のため消費せらるゝのであるから、棉花の生産のため社會的に必要とされた労働の分量は、やがて綿絲の生産のため社會的に必要とされる労働量の一部を構成するのであり、従つて棉花の價値はそのまゝ綿絲の上に移轉するのである。

\* 『社會問題研究』第三十二冊(大正十一年四月發行)、通冊一一二頁

勿論、生産手段がその價値を生産物の上に移轉する様式は様々である。何故といふに、生産



物が生産手段の価値を攝取するのは、生産過程において生産手段が失ふところの価値に止まるのであり、しかもその失ふところの価値の分量は、生産手段の種類を異にするによつて相違するからである。例へば燃料としての石炭の如きは、生産過程において跡方もなく消え失せる。また染料の如きも、たとひその跡方を生産物の上に残すにしろ、そのもの自身の獨立の存在は生産過程において失はれてしまふ。次に原料は、生産物の實體を形成するに至るものであるが、しかしそれと同時に、原料そのものではなくなる。何れにしても、すべての助成材料および原料は、生産過程に這入ることにより其の獨立の姿を失ふのであり、それと同時に、それらものの価値は、全部一時に新たな生産物の上に移轉する。しかし同じ生産手段でも、機械、建物等の労働手段になると、それは現状を維持しながら繰り返し何回もの生産過程に役立つのであり、一回分の生産過程において失ふところの使用価値は、ただその一部分に過ぎぬのであるから、従つてその失ふところの価値、即ち其のものから生産物の上に移轉さるゝ価値も、またその一部分づつである。けれども価値の移轉が此の如く漸次的、繼起的に行はるゝといふことは、遂にその全部の価値が移轉さるゝに至ることを妨ぐるものではない。かくて一切の生産手段の価値は、晚かれ早かれ、すべて新たに生産せらるゝ消費資料の上に移轉する。即ち總べての生産手段が、直接か間接か、間接のまた間接かに、必ず消費資料を生産するための

手段となるといふことは、畢竟、すべての生産手段の価値が、窮極において、必ず消費資料の価値となつて現はれるといふことに外ならぬ。だから、価値の観点から見ても、『手段となるべき物のみ無暗に殖えて、その目的とするところの消費資料の生産が却て減少するといふことは、決して在り得ない』のである。

高田博士は更に言はるゝやう、『生産手段の増加するにつれて消費財または享樂財の生産額の増加あることを要すとなすカウツキーと河上博士との見方は、生産方法に變化なき限りといふ假定の下において眞理である。然れども、資本主義生産と切り離すべからざる生産方法の變化を考へ來たれば、これ到底成立し得べからざる見解である』と。

茲に博士が『生産方法の變化』と言はるゝは、労働の生産力の増加を指す。しかるに此の労働の生産力の増加とマルクスの擴張再生産の表式との關係は、正に私が本誌前冊（『社會問題研究』第六十九冊）において問題としたところであり、さうして私はその際、『もし労働の生産力が増加するならば、それにつれてV即ち可變資本（労働者階級の受くる勞賃）に相當する部分のみが、相對的には益々減少することとなり、かくて社會的生産は年々より擴張されたる規模において行はるゝに拘らず、従つてまた生産せらるゝ消費資料の價值量は年々増加しゆくに拘



らず、社会成員の最大多数を占むる労働者階級のこれら消費資料に對する需要は、年々相對的の減少を示すこととなる、云々』と述べておいたのである。この主張は博士の意見と恰も正反對である。私は進んで労働の生産力の増加を問題とするであらう。

労働の生産力の増加とは、一定分量の労働を以て生産し得る使用価値の増加のことである。例へば、十時間分の労働を以て一足の足袋を生産してゐたものが、同じ労働時間内に十足の足袋を生産し得るに至るならば、労働の生産力は十倍に増加したといふのである。さてこの場合に、労働の生産力が増加したのは、ただ足袋の生産過程においてのみであり、その原料（例へば木綿織物、絲、染料、こはぜ等）の生産過程においては、労働の生産力が全く不變であると假定するならば、一足づゝの足袋に含まれる原料の價值（蓄積されたる労働の分量）は不變であるのに、その上に追加さるべき生ける労働の分量は十分の一に減ずることになり、従つて一足づゝの足袋の價值は減少する。（労働の生産力が増加すれば、生産物の一單位の價值は、それにつれて減少するのである）。しかし足袋一足の價值は減少しても、生産せらるゝ足袋全體の價值は増加する。假に一足の足袋に要する原料の價值（ $x$ ）を五拾錢とし、十時間分の労働（ $y$ ）を壹圓とすれば、前の場合に生産せらるゝ足袋全體（それは一足に止まる）の價值は——假に原料以外の生産手段を無視すれば—— $x+y$ 、即ち壹圓五拾錢であり、後の場合に生産せらるゝ

足袋全體（それは十足に上ほる）の價值は  $10x+y$ 、即ち六圓である。（この場合、一足の價值は減少して六拾錢となる）。かくて足袋の生産量は、使用價值としては一から十に、價值としては  $x+y$  から  $10x+y$  に（壹圓五拾錢から六圓に）増加し、それと同時に、生産手段としての原料の生産的消費も、一から十に（五拾錢から五圓に）増加するのである。これを逆に言へば、生産手段としての原料の消費が一から十に増加するならば、生産物の價值量も、たとひ之と正比例的にはなくとも、 $x+y$  から  $10x+y$  に増加するのである。もしこの場合、労働（生ける労働）がより生産的に使用されるのみならず、生産手段たる原料（蓄積されたる労働）もまたより生産的に利用され、その不生産的なる消費が節約さるゝ（例へば屑となるべき部分の布地が減少する）に至るとすれば、生産手段たる原料の消費は例へば一から八に増加するに止まるに拘らず、足袋の生産量は、使用價值としては一から十に、價值としては  $x+y$  から  $8x+y$  に増加するであらう。（この場合、一足の價值は更に減少して五拾錢となる）。要するに、使用價值の觀點からしても、また價值の觀點からしても、生産手段たる原料の消費量が増加するに生産物の生産量が減少するといふことは、決して在り得ない。尤も生産手段たる原料が益々不生産的に濫費さるゝに至るならば、同じく  $y$  の労働を以て、以前には八の原料から八の生産物を生産し得たのに、今は十の原料から七の生産物しか生産し得なくなつたといふやうな、逆轉



的な場合が起り得る。この場合には、生産手段たる原料の消費は八から十に増加するに拘らず、使用価値としての生産物は八から七に減少するであらう。けれども、かゝる場合においてさへ、価値としての生産物は  $8x+y$  から  $10x+y$  に増加するのである。かくて吾々が原料を以て生産手段を代表せしむる限り、消費せらるゝ生産手段の価値量が増加して、之により生産せらるる生産物の価値量が減少するといふことは、決して在り得ないのである。

以上吾々は了解に便利なるため、重ねて原料が生産手段を代表するものと假定したけれども、更にこれを労働手段について見るも、畢竟は同じことである。何故なれば、既に述べたやうに、すべて生産手段は、原料であつても労働手段であつても、それが生産のため消費せらるゝならば、それ自身の価値を生産物の上に移轉することにおいて、何の變りもないからである。但し原料は單に一回の生産過程を通過することにより、それ自身の獨立存在を失ひ、従つてその価値の全部を生産物の上に移轉するけれども、労働手段は幾回もの生産過程に役立つものであり、従つてそれら幾回もの生産過程を通じ、その価値の一部分づゝを切れ／＼に生産物の上に移轉する。それゆゑ、マルクスの資本再生産の表式——価値の消費および生産の表式——には、原料の価値の全部が登録されてゐるに反し、労働手段の価値はその一部分しか登録されてゐるな

い。そこに兩者の差——謂ゆる固定資本と流動資本との差——が横たはる。私はなほ其のことを一言するであらう。

『各生産部門の生産に使用されてゐる總べての生産手段の価値』に相當する不變資本は、『機械、道具、役畜等の固定資本と、原料、助成材料、半成品等の生産材料より成る流動不變資本とに分れる。』このうち固定資本の方は、——例へば紡績機械が一ヶ年間繰の生産のため使用されても、幾分その価値を消耗するだけで、機械そのものは依然翌年度にも使用されるといふやうに、——各生産期間においてその価値の一部分だけを新たな生産物の上に移すに止まるのだから、マルクスの表式に現はれてくる不變資本は、生産物の生産のため現に使用されてゐる不變資本の全部ではない。<sup>\*</sup>例へば不變資本六〇〇〇單位（第一部門の四〇〇〇單位と第二部門の二〇〇〇單位との合計）のうち、四五〇〇は流動資本であつて、残りの一五〇〇が一生産期間内における固定資本の消耗を現はすものであり、且つその消耗率は現に使用されてゐる固定資本の總體の価値の一〇パーセントに相當するとするならば、現に使用されてゐる不變資本の總額は、流動資本に屬するもの四五〇〇、固定資本に屬するもの一五〇〇〇、合計一九五〇〇に達するわけである。即ちマルクスの表式に現はれてゐる不變資本六〇〇〇は、實はこの一九五〇〇の一部に過ぎないのである。



\* 假に『社會問題研究』第六十九冊（通冊二三五頁）に載せたる表式についていふ。  
これを要するに、社會總資本の再生産に關するマルクスの表式は、年々消耗される資本の再生産（ならびに新たな資本の蓄積）に關する表式であるから、それには、年々消耗され復た恢復されてゆく（擴張再生産の場合には、ただに消耗されたものを恢復するばかりでなく、それ以上に新たに蓄積されてゆく）ところの資本が、登録されてあるだけである。それゆへ原料、助成材料等、その全部が一回の生産過程により消耗される流動資本は、その全部の價值が表式の上に現はれてゐるけれども、労働手段の如く、一回の生産過程において僅にその價值の一部を消耗するに過ぎざる固定資本にあつては、その消耗される價值分のみが表式の上に現はれ、現に使用されつゝある労働手段の價值の大部分は、表式の外に横たはるのである。

さて私が以上のことを述べ來つたのは、労働手段としての生産手段と生産物との關係を一層明かにせんがためである。けだし労働手段が蓄積されるにつれて、労働の生産力は高まるのであるから、労働の生産力の増進は、また多くの場合、労働手段としての生産手段の増加を伴ふ。けれども、それら生産手段の價值は、生産のため消耗される限りにおいてマルクスの表式に現はれ來たるのであり、さうしてそれが生産のため消耗されたのであれば、それは必ず生産物の價值の上に移轉され、生産される消費資料の價值の一部となつて現はれるのである。だから、これを表式に現はるゝ範圍において見るかぎり、労働手段も原料も、その價值を生産物の上に移すことにおいて變りはない。それらは必然的に、生産物たる消費資料の價值を構成する。生産的に消費される生産手段の價值が増加するに、それによつて生産せらるゝ消費資料の價值が却て減少するといふことは、たとひ生産力の増加があつても、その他の事情にして變化なき限り、事實上決して起り得るものではない。

高田博士の言はるゝところによれば、『生産手段の生産額の増加するにつれて消費財または享樂財の生産額の増加あることを要すとなすカウツキーと河上博士との見方は、生産方法の變化なき限りといふ假定の下において眞理である。……而も生産方法に變化ある限り、この命題は成立せず。而してツガンの數字表にありては、不變資本と可變資本との割合が年々變化してゐる、これは正に生産方法の變化そのものを意味すると見なければならぬ。この變化ある限り、消費財の生産額は減少してなほ生産手段の生産額は増加し得る。』かゝる博士の主張が誤りである（と私の思ふ）ことは、以上節を重ねて述べ來つたところであるが、なほ最後に私はツガンの表式について吟味するであらう。

前に掲げたやうに、ツガンの表式は次の如き數字から成る。表中の P は生産手段、a は勞



賃、 $r$ は利潤——之れをマルクスの符號に翻譯すれば、 $p$ は $c$ （不變資本）、 $a$ は $v$ （可變資本）、 $r$ は $m$ （剩餘價値）に當る。

	(一)生産手段の生産	(二)労働者用消費資料の生産	(三)資本家用消費資料の生産
第1年度	$1632p + 544a + 544r = 2720$	$408p + 136a + 136r = 680$	$360p + 120a + 120r = 600$
第2年度	$1889p + 496,8a + 828,1r = 3312,3$	$372,6p + 93,2a + 155,2r = 621$	$360p + 90a + 150r = 600$
第3年度	$2585,4p + 484,6a + 1239r = 4309$	$366,9p + 68,9a + 175,5r = 611,3$	$360p + 67,5a + 172,5r = 600$

(註) 右に掲げたツガンの表式についての福田博士の説明を左に轉載しておく。\*

\* 『社會政策』四九五—四九九頁

『右を説明して見よう。第一年度に於ては、生産要具の價値は、支拂銀高の三倍と假定し、支拂賃銀高と利潤とは同額と假定する、そこで假りに(一)生産要具の生産に於ては、後の二者を五四四とすれば、生産要具高は其三倍の一六三二である、此三者の總計が、生産要具生産一ケ年の結果である、其高は二七二〇である。(二)労働者消費資料の生産に於ては、後の二者を各々一三六とすれば、前者は四〇八で、三者總計六八〇となり、(三)資本主消費資料の生産に於て、後の二者を各々一二〇とすれば、前者は三六〇で、三者總計六〇〇となる譯である。ところが、第二年度に於ては、支拂賃銀高( $a$ )は二割五分減少し、利潤高( $r$ )は斯く減じた高丈け増加すると假定し、資本主の消費高は其價値が變らぬものと假定してあるのだから、資本主消費資料の生産に於て次の變化が起る。要せられる支拂賃銀高

は、第一年度には一二〇であつたが、第二年度に於ては、其二割五分減の九〇となる。其反對に利潤高は其減じた高(即ち三〇〇)だけ増すのであるから、 $(120 + 30 = 150) \div 150 = 1$ となる。生産要具の價値は變化せず、第一年度三六〇、第二年度三六〇である。第三年度となると、支拂賃銀高は更に二割五分(即ち二二・五)丈け減じて六七・五となり、利潤は其れだけ増して一五〇が一七二・五となる、生産要具の高は依然として三六〇である。(一)の生産要具生産、(二)の労働者消費資料の生産に就ても、同一の變化が起るのである、其れを右表に數字で現はしたに過ぎない。そこで利潤の高は、第一年度に於ては(一)五四四、(二)一三六、(三)一二〇であるから、總計八〇〇であつた。前の假定によつて、其の二割五分即ち四分の一が資本化せられる、即ち二〇〇が資本として蓄積せられるのである。仍て資本主が第二年度に於て自己の消費に充て得る高は $800 - 200 = 600$ である。資本主の消費高は變らぬものと假定した。即ち其高は常に此の六〇〇である。

『第一年度の終りに於ては、生産要具は二七二〇だけ生産せられたことは、前に算出した通りである。此高は第二年度の生産に全部投下せられて、生産要具用一九八七・四、労働者消費資料生産用三七二・六、資本主消費資料生産用三六〇の割合で分割せられる。同じく第一年度の終りに於ける労働者消費資料生産高は六八〇である、此高は即ち第二年度の三部門に於ける支拂賃銀高の合計 $408p + 93,2a + 90 = 680$ と同じである。即ち全部其儘第二年度に於ける労働者消費費用に充てられるのである。同じく第一年度の終りに於ける資本主消費資料の生産高は六〇〇である、此額は些の増減なく、第二年度に於て資本主の消費に充てられるのである、即ち第一年度の生産結果は一も残す所なく、悉く第二年度の生産及消費



の兩用に充用せられる。第一年度の支拂賃銀總額は  $544 + 136 + 120 = 800$  で、第二年度の其は  $406, 8 + 93,2 + 80 = 680$  である。即ち  $800 - 680 = 120$  だけ第二年度に於て減ずる。換言すれば、労働者の消費は一割五分減するのである、之に反し資本主の消費高には變化ないものと假定してある。第一年度に於ける三部門全體の總生産高は  $2720 + 680 + 600 = 4000$  で、第二年度の該當額は  $3312,3 + 621 + 600 = 4533,3$  で、——一割三分の増加に當る。即ち消費高が一割五分減じたにも拘らず、生産高は一割三分増したのである。第三年度に於ても同様に労働者消費高は更に六二一に減じ、生産額は四五三・三が五五二〇・三に増加するのである。』

この表式を見ると、各部門における資本の構成（不變資本と可變資本との比）は、年々著しく高級化してゐる。殊に第一部門および第二部門においては、その高級化の程度が甚しい。例へば第一部門における第一年度の資本構成は  $1632c : 544v$  であつて、不變資本は可變資本の三倍であるのに、第三年度のそれは  $2585,4c : 484,6v$  であつて、即ち不變資本は可變資本の五倍以上となつてゐる。更に各部門における剰餘價值率（可變資本と剰餘價值との比、即ち労働者の搾取さるゝ度合）を見るに、これもまた年々に増加してゐる。例へば第一部門における第一年度の剰餘價值率は  $511v : 514m$  即ち  $100$  パアセントであるのに、第三年度におけるそれは  $484,6v : 1239m$  即ち約  $115,6$  パアセントとなつてゐる。既に前冊<sup>\*</sup>において述べたやう

にマルクスの擴張再生産に表式においては、

$$C : V \text{ (資本の構成)} = \text{不變} \quad V : M \text{ (剰餘價值率)} = \text{不變}$$

といふことが假定されてあるが、それは要するに、労働の生産力が一定不變であるといふ假定を設けたに等しい。しかるにツガンの表式には、この假定が極端に破壊されてゐるのである。

それは、まことに高田博士の言はるゝ如く、生産方法の變化——労働の生産力の發展——を計算に入れたものである。最も著しき程度に之を計算に入れたものである。それゆゑ、もし私の主張するところが正しかつたならば、——私は、吾々がもし労働の生産力の發展を計算に入れるならば、マルクスの擴張再生産の表式に示すが如き、各種生産部門の間における比例的關係は全く破れてしまふ、と主張するのである、——各種生産部門の間における比例的關係は、ツガンの表式において全く破壊されてしまふべき筈である。しかるにも拘らず、ツガンの示すところによれば、それらの比例的關係は年々圓滑に維持されてゆくことになつてゐる。それは何故か？

\* 『社會問題研究』第六十九冊一六頁（通冊二四〇二頁）

\*\* 同上、一八頁（通冊二四〇四頁）以下参照

それはツガンが、二つの在り得べからざる事實を、表式のうちに假定してゐるからである。その一つは、生産せらるゝ生産手段の價值總量は年々増加するに反し、生産せらるゝ消費資料



のそれは年々減少するといふ事實それ自身である。かゝる奇妙なる結果を齎すために、ツガンの假定せざるを得なかつた事實は、次の如くである。即ち生産手段の生産部門にあつては、その生産額が第一年度の二七二〇から第三年度の四三〇九に増加するに拘らず、消費資料の生産部門にあつては、これに利用さるゝ生産手段が、労働者用消費資料の生産部門および資本家消費資料の生産部門の双方を合せて、第一年度の七六八（ $108p+360p$ ）から第三年度の七二六・九（ $366.9p+360p$ ）に減少する。言ひ換ふれば、生産手段は益々多く生産せらるゝに拘らず、消費資料の生産のためには益々僅かの生産手段が利用さるゝに止まる。しからば、益々多量に生産せらるゝ餘分の生産手段は、如何なる方面に利用さるゝかと言へば、生産手段そのものの生産部門においてである。ところで此の最後の逃げ場が、吾々にとつては問題なのである。これを譬へて言へば、それは益々多くの小麥を生産しながら、これをバンの原料（消費資料の生産部門における生産手段）に使用することは益々減少してゆき、同時に、その益々多くのものを小麥そのものの原料即ち種子（生産手段の生産部門における生産手段）として使用するといふが如くである。かくて小麥を收穫すれば之を種子とし、その種子から再び小麥が收穫さるれば、更に之を種子とし、いつまでも小麥から種子、種子から小麥といふ循環を繰り返して居れば、バンの生産額は少しも増加せず、却て次第に減少するのには、バンの原料（生産手段）たるべき

（しかしバンの原料とはせざる）小麥の生産額のみは、いつまでも無限に増加するといふのである。まことに斯くするならば、生産手段の價值は、ツガンの假定の如く、永久に消費資料の價值を構成することなくして終るであらう。しかし永久に消費資料の生産に役立たざる生産手段は全く無用の長物であり、これが生産のために費されたる労働は全く浪費されたものであり、従つてそれは最初から實は何等の價值をも形成せぬであらう。ツガンの表式によれば、生産手段の生産額は、第一年度が二七二〇であり、第三年度が四三〇九であるから、生産手段の生産部門では著しき程度の擴張再生産が行はれたことになつてゐる。しかし労働者用消費資料の生産部門における生産額は、第一年度の六八〇が第三年度には六一一・三に減少してゐるのだから、そこでは縮小再生産が行はれてゐるのであり、また資本家用消費資料の生産部門における生産額は、各年度を通じて六〇〇であるから、そこには單純再生産が行はれてゐるに止まるのであり、かくて是等兩部門における所要の生産手段を合計したものは、第一年度の七六八（ $108p+360p$ ）が第三年度には七二六・九（ $366.9p+360p$ ）に減少してゐる。斯様に生産手段の所要額が減じてゐるのだから、生産手段の生産部門においても實は擴張再生産の必要も可能もなく、そこでも縮小再生産が行はれて居れば足るし、また行はれてゐなければならぬのである。これを數字に現はせば、その關係は例へば次の如くなるであらう。



	(一)生産手段の生産	(二)労働者用消費資料の生産	(三)資家用消費資料の生産
第一年度	$1632p + 544a + 544r = 2720$	$408p + 136a + 136r = 680$	$360p + 120a + 120r = 600$
第二年度	$1632p + 485a + 544r = 2661$	$372.6p + 93.2a + 155.2r = 621$	$360p + 120a + 120r = 600$
第三年度	$1632p + 475.3a + 544r = 2651.3$	$366.9p + 68.9a + 175.5r = 611.3$	$360p + 120a + 120r = 600$

この表式のうち、第二および第三の消費資料の生産部門における生産額は、ツガンの原式におけるそれと同じであり、ただ相違するところは、第一の生産手段の生産部門における生産額が、ツガンの原式にあつては擴張再生産を示してゐるに反し、この表式にあつては縮小再生産を示してゐる點である。ツガンは浪費された労働を價值として計上するがゆゑに、實際は縮小再生産にて足るものが、彼れの表式にあつては擴張再生産となつて現はれてゐるのである。

ツガンの表式に假定されてゐる、在り得べからざる第二の事實は、可變資本の絶対的減少である。例へば第一部門における第一年度の可變資本は五四四であるのに、第三年度のそれは四八四・六に減少して居り、第二部門におけるそれは、一三六から六八・九に、第三部門におけるそれは、一二〇から九七・五に減少してゐる。もし吾々が労働者一人當りの勞賃を不變なりとすれば、かゝる可變資本の減少は即ち賃労働者の遞次的解雇を意味する。

この際吾々は、高田博士の想像された先きの漁夫團を思ひ起すことを便利とする。既に私の

指摘したやうに、博士はこの漁夫團をして、最初は一日八時間づゝの労働に従事せしめ、網を作りたる後は一日四時間づゝの労働に服せしむるに止めて居られる。今この所要労働の半減は何を意味するか？ お伽話の世界に現はるゝ漁夫團にとつては、それは彼等の勞苦が半減したことを意味する。しかし資本主義の世界においては、一日の労働時間にして不變なるかぎり、それは就業中の賃労働者が半ば解雇されることを意味する。資本主義の社會における労働者は、その労働力を資本家に賣ることによつてのみ生活し得る。彼等がその職を失ふことは、即ち彼等がその生活の方便を失ふことである。高田博士の假定されたるが如き事實は、労働者階級の半ばを餓死せしむることによつてのみ、始めて實現され得る。ツガンの表式もまた略ぼ之と同じことを假定する。

吾々といへども、労働の生産力の發展に伴ひ、可變資本が相對的に、即ち不變資本に對する比において、次第に減少するの事實を認める。しかし、かゝる可變資本の相對的減少でさへ、既にマルクスが資本論第一卷において詳論してゐるやうに、益々大なる『相對的過剰人口または産業豫備軍』を造り出だす。『特殊な資本家的の生産方法、これに相應する労働の生産力の發展、これがために惹き起さるゝ資本の有機的構成における變化は、蓄積の進行または社會的富の増殖と、ただ歩を共にするばかりでなく、それは比較にならぬほどより、迅速に進む。かく



て蓄積の進行に伴ひ、不変資本の可變資本に對する比は、初めは1:1であつたとしても、2:1, 3:1, 4:1, 5:1, 7:1等となり、従つて、資本の増殖に伴ひ、その總價値の1/2の代りに、その後はただ1/3, 1/4, 1/5, 1/6, 1/7等が労働力に轉化さるゝに止まり、これに反し2/3, 3/4, 4/5, 5/6, 7/8等が生産手段に轉化さるゝこととなる。労働に對する需要は、……總資本の大きさに對し相對的に減少し、また總資本の大きさの増大につれ加速度的級數を以て減少する。』かくて資本の労働に對する需要の増加は、益々労働者階級の人口の増加に追及し得ざることとなり、失業者の群れは益々膨大する。それは『困窮、壓制、隸屬、墮落、搾取』の量の益々増大することを意味する。それは『資本獨占が、嘗てそれと共に又たその下において花を開きたる、その生産方法（資本家的生産方法）の桎梏となれる』ことを意味する。それは『生産手段の集中と労働の社會化とが、遂にその資本家的なる外被と兩立し難き一點に達せる』ことを意味する。簡單に言へば、それは資本家的生産が全く行き詰まれることを意味するに外ならぬ。

\* 拙著『資本論略解』第一卷第三分冊、一〇三頁以下、特に一二六頁以下参照

此の如く可變資本の相對的減少でさへ、既に資本家的生産の行き詰まりを意味する。しかるにツガンの表式は、更に進んでその絶對的減少を假定するのであるから、それは實に恐るべき

過剰人口を假定するのである。試にツガンの表式について、労働者階級の提供せる生ける労働量を通算するに、

(一)生産手段の生産	(二)労働者用消費資料の生産	(三)資本家用消費資料の生産	合計
第一年度 (544 <sub>1</sub> +544 <sub>2</sub> =1088)	+ (136 <sub>a</sub> +136 <sub>r</sub> =272)	+ (120 <sub>a</sub> +120 <sub>r</sub> =240)	= 1600
第二年度 (496,8 <sub>a</sub> +828,1 <sub>r</sub> =1324,9)	+ (93,2 <sub>a</sub> +155,2 <sub>r</sub> =248,4)	+ (90 <sub>a</sub> +150 <sub>r</sub> =240)	= 1813,3
第三年度 (484,6 <sub>a</sub> +1239 <sub>r</sub> =1723,6)	+ (68,9 <sub>a</sub> +175,5 <sub>r</sub> =244,4)	+ (67,5 <sub>a</sub> +172,5 <sub>r</sub> =240)	= 2212

右の如く夥しく増加してゐるが、これに反し労働者階級の受くる勞賃を通算すれば、

第一年度 544+136+120=800	第二年度 496,8+93,2+90=580	第三年度 484,6+68,9+67,5=521
----------------------	------------------------	--------------------------

右の如く著しく減少してゐる。このことは、假に一人當りの勞賃を不變なりとすれば、雇傭労働者の數は八〇〇から六二二の割合に減少する（もし労働者數を不變なりとすれば、勞賃が八〇〇から六二二の割合に下落する）に拘らず、これら労働者の提供する労働量は一六〇〇から二二二二の割合に、また彼等が資本家により搾取せらるゝ労働量は八〇〇(544<sub>1</sub>+136<sub>r</sub>+120<sub>r</sub>)から一八五七(1239<sub>r</sub>+175,5<sub>r</sub>+172,5<sub>r</sub>)の割合に、増加することを意味する。それはたとひ考へ得らるゝ事態であるとしても、生ける人間の——労働者階級の——耐へ得られざる事態である。資本家的社會の外被は斯かる事態の出現以前に爆發せざるを得ぬのであり、そのこと自身



が取りも直さず資本家的生産の行き詰まりを意味する。かくてツガンは、資本家的生産の行き詰まり以上の事實を前提として一の數字表を作り、單なる紙上の運算によつて此の生産方法の永久に行き詰まらざることを立證し得たりとなすものである。

(一九二六年——大正十五年——四月發行『社會問題研究』第七十册所載)

*(Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including mathematical formulas and names like 'M. K. ...')*

<p>昭和四年十一月十五日印刷 昭和四年十一月十七日發行</p>		<p>著 者 河 上 肇</p>	
<p>權 作 者</p>		<p>發 行 者 市 川 義 雄 東京市牛込區早稻田鶴卷町四七一</p>	
<p>有 所</p>		<p>印 刷 者 堀 内 文 次 郎 東京市牛込區山吹町一八一</p>	
<p>發行所 東京市早稻田鶴卷町四七一 振替東京六七五一九番</p>		<p>【定價一圓五十錢】</p>	



希望閣

〔行印所刷印原萩〕

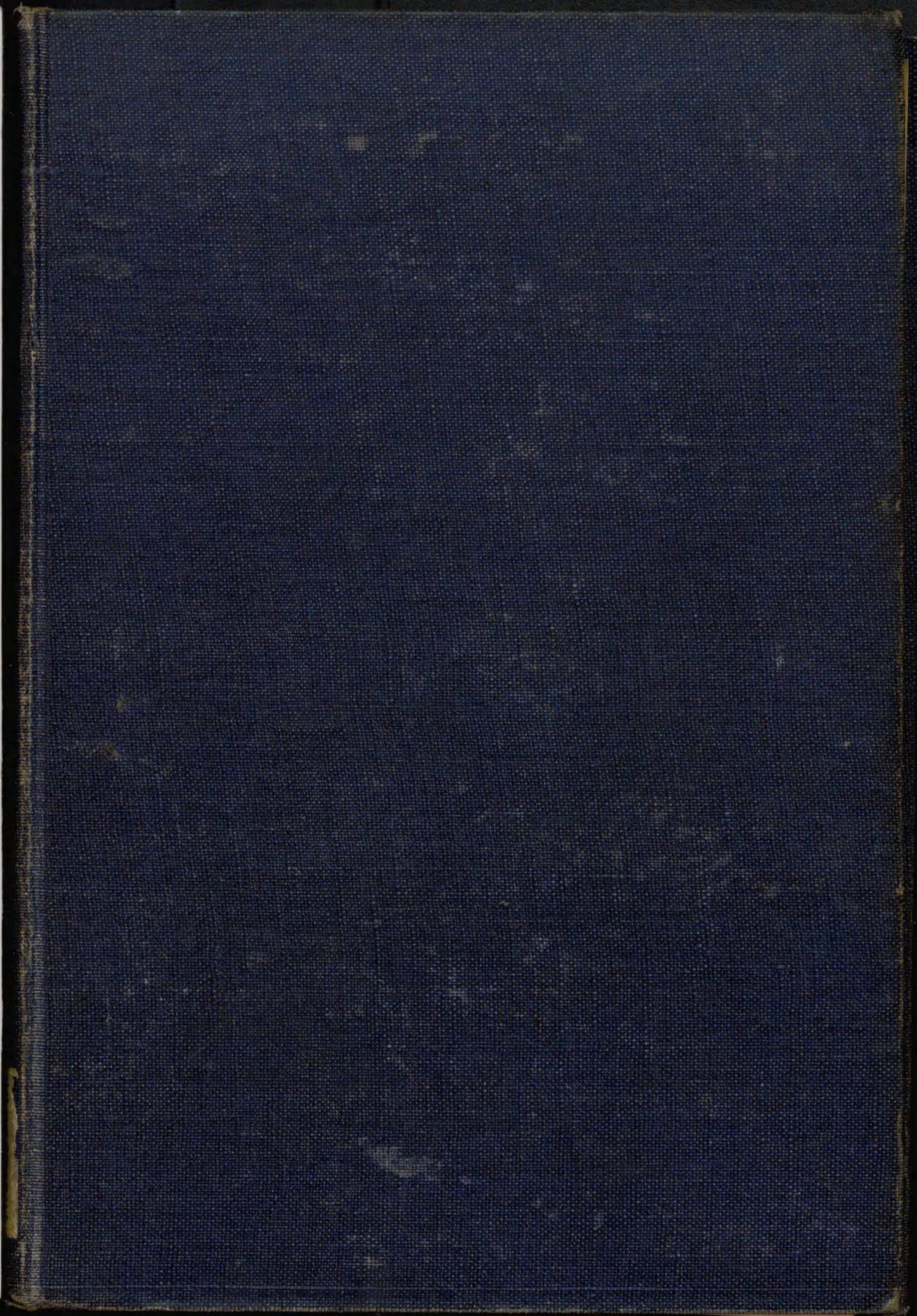






599  
118





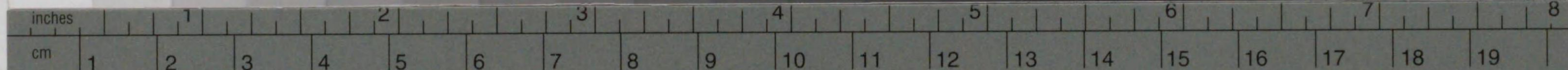


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

